第一部 名教自然

煙洲先生と横浜

今夕は第四〇〇回煙洲会の記念例会として何か先生の思い出を語ってはという御依頼がありましたので、お引きうけしましたが、今となって、果して自分が適任なのだろうかと、いささか不安になって参りました。暫らくごしんぼうをお願い申します。

題目は「煙洲先生と横浜」と致しました。それは申すまでもなく、横浜は先生が第二の郷里として最も愛し、またその御仕事の上で最も御活躍になった所だったからです。

横浜高等工業学校の開校は大正九年の四月でありますが、先生が初めて横浜という土地と関係を持たれたのはいつだったのでしょうか。これは先生から直接お伺いしておりませんので分かりませんが、学校の創立に当り、初代校長として、その運営を委せ得る人物の選考については地元の神奈川県ならびに横浜市の当局がその適任者の物色に最大の努力を払ったに相違なく、後に東京商業会議所会頭となった井阪孝、横浜の富豪原富太郎、同じく市政界の大御所中

村房次郎の三氏が高工の創立と共に学校の維持員となられたことからも、これらの人々の強力な御推薦のあったことは容易に想像されるのですが、先生の御令弟棟一氏が横浜市の左右田銀行の頭取であった関係で、已に先生の人物、才腕については十分評価済みだったのではなかろうかと推察致します。

従来、高等教育の機関のなかった横浜に高等工業学校を設置し、しかも、独自の教育方針を以て天下に範を示す名校長を見出し得たことは、横浜市としては勿論、わが国教育界として正に慶賀すべきことでありました。ここで先生が校長に御就任になる以前の横浜について簡単に回顧して見たいと思います。

御承知のように、横浜は開港当時は横浜村という一小漁村で、大岡川の川口にあるデルタ地帯を埋めた所謂吉田新田でありました。これは地元の吉田勘兵衛氏が私財を投じて造ったものです。吉田氏は真に横浜のパイオニーアでありました。私はこの吉田氏と因縁のある吉田小学校の出身ですが、私の小学生時代には、阪東橋からお参の宮までは一面の田圃で、そこの小さい流では、ふな等が沢山捕れる程の田舎でした。関東大震災の一寸前にロンドンの Educational Co. という書店で出版された Harmsworth's Universal Encyclopedia という十二巻からなる手頃な百科全書が、その後間もなく丸善を agent として売り出されましたが、その横浜と

いう項目を見ますと、横浜の人口は四十三万、写真には俗にメリケン波止場という大桟橋と税関の建物が掲載されています。この桟橋の上部は木造のすのこを張ったもので、下には波の揺れ動くのが見え、雨の日など、その上を足駄で通るのが子供心には怖かったことを覚えています。桟橋の入口では米人の新聞売りが大鞄に入れた The Examiner とか The Japan Advertiser などを売っていたものです。これらの新聞は当時神戸の The Japan Chronicle という英国系新聞と対照的なものでした。

山手には御存知の外人墓地（当時は異人墓と呼んでいました）の筋向いに赤煉瓦に木蔦の絡らんだ Gaiety 座という外国からの旅役者が興行する劇場がありました。この劇場は明治十八年に建てられたもので、その名前はロンドンにある劇場名からとったものです。東京から坪内逍遥はじめ文士連中が見物に来たそうです。この辺は今日港の見える丘の小公園が附近にあって桜の名所、横浜の文学散歩の一つのルートになっています。この他、文学散歩に関係して赤煉瓦の通称二〇番ホテル（英国系）というのが海岸通りにありました。当時山下公園はなく直ぐ前が water front でした。このホテルに日本に帰化した小泉八雲、ラフカディオ・ハーンが同ホテルの支配人と知り合いだった関係で、よく宿泊したと云われています。

横浜高工の創立は、前にも申しました通り大正九年、つまり一九二〇年で、この年の四月四

日（四月四日は私の誕生日なんです）に私は結婚して、蒔田の英和女学校（今日の成美学園）の丘の麓に世帯を持ちました。横浜高工とは余程縁が深かったのですね。当時、蒔田、弘明寺方面には未だ埋め立て地が多く、その空地で明大の野球部（主将は岡田源三郎という早実出身の名捕手で、戸塚の穴八幡の宮司の息子）とカナダチームとの対戦がありました。野球の発祥地と云われる横浜での主要なゲームは勿論、横浜公園内の芝生の運動場で行われました。ここは主として英人専用のクリケットと米人専用の野球のために使用されていました。Y.C.A.C.という横浜在住の米人対神戸外人チームの野球の定期戦をはじめ、日露戦争直後、米国の太平洋艦隊が、戦力を誇示する意味で大挙して横浜港に来て以来、その数の殖えた米艦チームとの野球試合はこの球場で行われました。早大の野球チームが初めて米国遠征に出かけたのが明治三十八年で、主将には都市対抗野球の創始者、橋戸頑鉄、投手には当時日本随一の河野安通志という連中で、走者を塁に進めるバント戦法はこの時の洋行土産だそうです。この早大チームを初め、慶応や学習院のチームが外人を相手にしたのはこの公園球場でした。ここで米艦チームが横浜に来た時のエピソードを御紹介しましょう。米艦の水兵がある朝、横浜市内を歩いていると、市民がお互いに「お早う、お早う」と挨拶するのを聞いて、驚いた。「さすがは横浜だ。市民が皆、俺達の生れ故郷の名を知っている」と。これは彼等が「お早う」というのを

「Ohio」と聞いたからです。もう一つ笑話があります。それは、日本人はお礼を云う時に、「ありがとう」と云います。これを聞いた米艦の水兵が、これは分かり易いと思った。それは英語に alligator という言葉があるので alligator（アリゲータ）と云っていた。alligator というのは「わに」のことです。ところが、この水兵、alligator という言葉を使うのを忘れて、「わに」という別の英語 crocodile（クロコダイル）と云ってしまったという話である。御本人、相手の日本人が眼を白黒している様子を見て、「しまった」と思ったかどうか？　この米艦の Ohio をはじめ、Pennsylvania とか Wisconsin 等のチームが早慶とこの運動場で試合をしたものです。また早大の米国遠征以来、米国の大学チームの Chicago, Stanford, Washington（シアトル所在）などが親善試合のために来日するようになり、明治四十一年にはセミプロの Reach All Americans がこの公園球場で試合するようになった。このチームの中には当時のメージャーリーグ（American league）所属のデトロイトタイガースの二塁手デリハンティも参加していた。

さて、大正九年から同十一年にかけては世界的不況の年でありました。横浜財閥の一つ茂木商店（野沢屋の前身、社長は茂木惣兵衛氏）の倒産に伴い、七十四銀行が破産しました。このあおりをくって、商工実習学校の創立にあたり、貿易商安部幸兵衛氏から寄付された一〇〇万

円の中、五〇万円（主として証券）の預金がフイになってしまいました。当時、兼任校長であった煙洲先生の御苦労も並大抵ではなかったろうと思われます。因に当時の茂木邸というのは、現在の野毛山（動物園の敷地を含む）公園一帯に亘る宏大なもので、邸内には細流があり、野鳥の声が聞える別天地で、毎年十一月にはそこの菊花園が公開される横浜名所の一つで、三渓園と共に名園の双璧でした。ところで、前に申しました倒産した七十四銀行の整理銀行として生れたのが今日の横浜銀行です。

この辺で煙洲先生のプロフィルに注目したいと思います。皆さんは、夫々先生に対するイメージをお持ちのことと思いますが、私には、先生の印象としては、あのイギリスの宰相 Winston Churchill に似ていられるように思われます。煙洲のお名前が示すように、葉巻をお喫いになることも共通しておりますが、御性格の点で、Churchill が世界第二次大戦を勝ち抜いたあの辛抱強さは、先生が関東の大震災で、校舎が全潰した時、少しも動ずる色なく、文部省の名古屋への移転命令を拒否して、横浜の地を離れなかったあの冷静、沈着さの中に共通したものが窺われます。

Churchill は第一次大戦の時、海相として活躍し、その素晴らしい海戦記録を著述してノーベル文学賞の栄誉を獲得しましたが、煙洲先生もある意味での歴史家でありました。

歴史と申せば、先生の書斉にはEdward VII伝がありました。六十年にも及ぶVictoria女皇の君臨された後、やっと王位につかれた方ですが、今世紀の初め、日英同盟を締結したこの英国の王様の人間味豊かな人物像に先生は興味を持たれたことと想像します。なお、先生は先輩の徳富蘇峯先生の著書を非常に愛読されていたことは皆様もご存知のことと思います。蘇峯先生はよく英国の偉大な歴史家で、あの有名な英国史やインド総督のクライブ伝等の著者で知られているMacaulayと比較されますが、それは蘇峯先生の文体がこの英国の文豪のそれと酷似しているからでありましょう。

次に、先生が、教え児達から御退官の記念に、先生の銅像をという案が出された時に、これを一蹴されて、あの名教自然碑を選ばれた一事を以て、先生の高遠な理想が窺われるように思います。先生は御自分の姿を風雨に曝らすことを喜ばれなかったのです。前に申したChurchillの海相時代、首相だったあの有名なLloyd GeorgeはChurchillと同様、短軀でした。地方遊説の際、そこの司会者がLloyd Georgeの短軀を見て、一寸意外だったという風に紹介すると、首相は、「この地方では人物を評価するのに、顎から下の長さで測るようだが、わしの評価は顎から上である」と応酬して聴衆をどっと笑わせたという話があります。煙洲先生が御自分の姿を銅像で残したくなかった理由もその辺にあったようです。

次に先生の教育について考えてみたいと思います。横浜は高等教育の遅れた所でした。明治から大正の初期にかけて、横浜の教育に貢献したのは何と云っても mission schools でした。当時市内には横浜商業学校（通称Y校）、横浜一中（通称神中）、二中、三中と女子の平沼（公立）と元町（私立）位のもので、他はフェリス、双葉（紅蘭）、共立、関東学院、捜真等の mission schools で、これらのミッションスクールはキリスト教による民主的な個性尊重の教育を以て知られていました。特に英語の点で優れていたフェリス出身の若松賤子さんの小公子の飜訳は明治時代に於ける白眉でした。原作は Frances H. Burnett という英国生れの米国小説家が一八八六年に著したもので、一八八八年に劇化され、評判の作です。その後映画にもなり、少年少女のための芝居としてわが国で上演されたこともありました。この Ferris は江戸の役者沢村田之助に義足を造ってやったあのヘボン博士の英語塾から女生徒ばかりを引き受けたミスキダーが明治三年に創立したものです。

こういう背景で誕生した横浜高工は新しい使命を持っていました。「名教自然」という、従来の官学の殻を破り、今日去勢された私学が忘却した自由啓発をモットーとする教育方針を堅持していました。先生の思想の中には同志社で学ばれた新島襄先生のキリスト教の土壌のあったことは否めません。また日本人の祖先崇拝、論語、中庸等の精神を重んじていたことも否定

出来ません。それに近代の科学精神をふまえて、教育の合理化をも忘れてはおりませんでした。ところで、先生が同志社を卒えてから第五高等学校で英語の教師、而もキリスト教の偉大な先覚者内村鑑三先生の後任をつとめられたというエピソードは余り知られていないようです。この内村先生の直弟子から南原繁、矢内原忠雄という二人の東大総長が生れたことは御存知のことと思いますが、この矢内原先生が嘗て文芸春秋に内村先生の伝記を書かれた時、五高時代の前記エピソードを、煙洲先生が矢内原さんに手紙を以て補足され、同先生から御礼状を頂いたというお話を承ったことがあります。只今、申し上げた南原、矢内原の両先生と共に内村先生の高弟であった関東学院の坂田祐先生のことをここに付け加えておきたいと思います。坂田先生は日露戦争の時に騎兵の特務曹長として従軍し、帰還してからは関東学院の前身である東京のミッションスクールの四年級に編入して貰い、同校の体育教官を兼務し、その後一高、東大へと進み、哲学を専攻された方ですが、坂田先生は煙洲先生の教育方針に非常に共鳴しておられました。大正十二年関東大震災の直後、先生は校舎復興資金募集のため渡米し、各地を歴訪された折、暫らくシカゴに滞在されました。この時私は初めて先生にお目にかかったのです。私は大学の裏手の Kenwood Avenue, 先生は前通りの Ellis Ave. にそれぞれ下宿しておりましたので、屢々往来してお話する機会がありました。たまたま、National League 所属の

New York Giants が Chicago Cubs と対戦して double-header を行うという好機が到来しましたので、早速、先生をこの試合に御招待することにしました。と申すのは、実は、坂田先生は一高の御出身で対三高の定期戦で応援に狩り出されましたが、野球の事は全然分らないので閉口したという話を聞いていたので、先生を啓蒙しようと思ったのです。それで、その試合の前夜先生の下宿へ押しかけて、野球に関する講義を二時間程やりました。その時、講義の冒頭に、「先生は学校長なんですから、野球の何たるか位は知っておかなくちゃ駄目ですよ」と申し上げたことを忘れません。そして翌日試合を観戦しながらいろいろと説明しました。その時のスコアなどは忘れましたが、真夏の本場野球の醍醐味を満喫しました。Giants 対 Cubs の試合と云えば、わが国の巨人阪神戦と云ったところで、この日には市長招待のパーティをもキャンセルする程の人気カードでした。忘れもしませんが、一九二四年というこの年はあのベーブルースが六〇本の本塁打を打った彼の最盛期でした。それで、幸に、私はルースが American League の Chicago Comisky のグラウンドで、対 White Sox の試合に一七回の延長戦で、彼が右翼の観覧席に決定的な大本塁打をかっ飛ばすのを観ることが出来ました。

野球の話がつい長くなりましたが、煙洲先生の教育の特色の一つに課外活動を奨励なさったことを忘れてはなりません。野球、陸上競技等、夫々の特色がありましたが、港である横浜の

学校として短艇部の活動に大きな声援を送られ、新艇が建造された時、これに、Suez, Panama, Magellan と命名されたことは有名で、この部が百戦百勝の快記録を樹立したことは御存知のことと思います。

先生がスポーツに理解を示されたのは、つまり、スポーツマンシップが国際人として進出するのに、不可欠なものとお考えになったからだと思います。またわが国古来の柔剣道についても個人の心身の鍛練に役立つものとして奨励なさったことは各部で御活躍になった皆さんのよく御存知のところでしょう。こうした心身の鍛練の他に、入学式や卒業式の行事においては勿論のこと、ふだんでも折に触れ御自分がお話になるばかりでなく、名士を招いて記念講演や、経済問題の集中講義を学生に聴かせるという行き届いたプログラムを常に御工夫になっておられました。石橋湛山先生や毎日の副社長の岡先生がその時の講師であったことも、御記憶の方があるかと思います。また卒業を控えた学生に対し table manners まで先生が範を示されるといった具合でした。

従来の横浜は貿易港として、生糸や茶などを輸出していたので、シルクロードに当る甲州財閥の若尾幾造氏などが活躍し、お茶の輸出が清水港に移るまでは大谷嘉兵衛翁が主宰する製茶業や、雑貨などの外国商社との取引きで、所謂、商館番頭（主としてY校出身者など）が幅を

利かしていたものですが、そうした時代も去って、工業技術が重視されるようになりました。ここにおいて煙洲先生の教育が脚光を浴び、京浜工業地帯の繁栄を導くに至ったと申しても過言ではありません。先生の教育は詰め込み主義ではなく、飽くまで自由啓発で、個人の自覚と責任を重んずるものでした。三無主義というのは、要するに名教自然のエッセンスで、煙洲先生という稀に見る教育者の理想に他なりません。先生が六ツ川の御自宅で学生に面接され、親しく対話を持たれたということは教育の真髄だろうと存じます。今日、修身とか倫理という言葉を口にすると笑う人があります。それは、今日の政治家の責任じゃないでしょうか。いや、そうとばかりは云いきれないのが残念…。

坪内逍遥先生が早稲田中学の校長を兼務していました時、御自分で修身の教科書を編纂しました。その教材は主として世界の偉人、君子の逸話を選び、先生一流の名文で表現された興味深いもので、且つ非常に教訓的なものでした。これは恐らく、先生御自身の生活態度が極めて厳正なものであったからでしょう。その逍遥先生が、総長の大隈伯が参観のため教室に入って来られた時、葉巻をくゆらしておられたのを見て、直にこれをたしなめたという話は有名であります。煙洲先生は葉巻の愛好家でありましたが、決してそんな不作法はなさいませんでした。震災後のバラック時代に、葉巻をお喫いになる時、先生はよく商工実習の校長室へ行かれ

たものでした。

戦後、暫らく葉巻に事欠くことの多かった時、冨山校長は米軍の教育担当官のマクマナス大尉が来校する度毎に、同大尉が敬意を表して葉巻を呈供したものですが、その都度、冨山先生は、これは煙洲先生のために頂きますと云って受取られるのを私は拝見しました。米軍の接収に関連して、思い出すのは、わが高工自慢のベッヒシュタインというピアノが徴用された時のことです。このピアノこそ煙洲先生が学生の教養のために購入されたもので、当時、全国でも稀らしい逸品でした。そのため是非返して貰いたいと米当局に掛け合って取り戻したことがありました。

こうした文化、教養の面まで心を配ばられた先生はさすがだと思います。本夕は、釈迦に説法ですから、名教自然について理屈めいたことは申しません。唯だ先生の御人柄と学校長としての具体的な施策の一端をお話したに過ぎませんが、最後に先生が九十歳の長寿を保たれた秘訣の散歩について一言したいと思います。先生は学校教育の基本である知育、徳育、体育の所謂、三位一体、演劇で申すなら俗に三一致（Three unities）でありますが、先生は正にこれを守った方でした。前に申した通り、学生の体育は勿論、御自分の健康に非常に留意されました。そのためには規則的な散歩を欠かさず、根岸にお住いの頃は、競馬場の周囲を散歩された

り、正月には根岸から伊勢山の皇大神宮へ徒歩で参拝なさっておられました。その際pedio-meter（歩測計）を携行されて、その距離を測っておられたことは有名であります。

根岸の競馬場と云えば、明治時代には東洋一を誇ったもので、私も少年時代、初夏の候、この競馬場の周囲のからたちの生垣の破れ目からジョッキーのカラフルな雄姿が風を切って走るのを見て、どんなに胸を轟かせたことか!! 当時、明治天皇が行幸遊ばされる時には、鉄道で新橋駅（現在の汐留の荷物駅）から横浜駅（現在の桜木町）にお着きになり、左手の弁天橋をお渡りになって、御用邸に入られ、少休止の後、馬車で市内をお通りになり、山元町を経て根岸にお出になられたものであります。

さて、煙洲先生が、この根岸から六ツ川にお移りになったのは昭和の五年頃だったと思いますが、杖をひく先生のお姿が見受けられましたのは高工御退官の頃からでしょうか。いづれにしても、「先生と杖」というのは未だに強く私の印象に残っております。また、戦時中、東郷神社を祠られて皇国の安泰を祈念し、また横浜高工の発展を念じながら、六ツ川の丘から下界を眺め、悠々自適の晩年をお送りになった尊い先生の御姿こそは私共に忘れ難いイメージであろうと存じます。

甚だ纏まらないお話で失礼致しました。これで私の講演を終ります。

樅の木は残った

先月、七代目阪東三津五郎丈の十三回忌追善の大歌舞伎、夜の部で、伽羅先代萩を観た。顔触れは、歌右衛門の政岡、雁治郎の八汐、幸四郎の仁木弾正、三津五郎の渡辺外記、勘弥の細川勝元といった豪華版である。この芝居は忠臣蔵と同様、所謂、アナクロニズムで、足利時代となっているが、例の仙台藩のお家騒動をテーマにしたもので、お馴染政岡と一子千松の忠義の物語である。主君のために身を鴻毛の軽きに置くという自己犠牲——自分を空しくするという武家道徳を強調したものである。これと同じプロットを別の角度から眺めて、新しい光を当てたものが一昨年NHKテレビで上映された「樅の木は残った」である。平幹二郎演ずるところの原田甲斐は非常に好評だった。講談やお芝居では、所謂、悪役、憎まれ者である。然しテレビの作者はこの人物を清廉の士に仕立て、直情径行を象徴する亭々たる樅の木にその風格をなぞらえている。この作家の歴史観が正しいか正しくないかは別として、時代の変遷と共に人

間の価値観が変わることはあり得る。教育における人間の理想像の変化もそうであろう。

己を空しうして忠孝に徹する武士道、軍人精神を基盤とした明治、大正時代のわが国の教育理想に欠陥はなかったであろうか。これに対する反省の警鐘を鳴らした煙洲鈴木達治先生「名教自然」の理念こそは自然を熱愛し、そのたくまざる生成発展の姿に個人の自由と尊厳を見出し、教育の理想はここにありと感得して、「晴耕雨読」をモットーとされたことは正に自由教育の真髄であろう。

横浜高工時代のキャンパスは、大岡川の堤と共に桜の名所として知られていた。然し、今は、残念ながら、その美観は見られず、機械工学科と造船工学科の傍に、その後に植えられた僅か数本の八重桜のみとなった。然し、欅やヒマラヤ杉が名教自然を謳歌するものの如く正面校舎の前に聳え立っている。

忘れもせぬが、佐藤事務官の時代に、乞われるがままに、拙宅の庭から二本のヒマラヤ杉を寄贈したことがある。思うに、当時は、構内に庭木が未だ少かったのであろう。

その二もとのヒマラヤ杉は、一つは建築工学科の前、もう一つは応用化学科の前に威容を誇っている。私はこのキャンパスを通る度毎に、わが子の成長を見るように歓喜にこの胸が一杯になる。

この頃は、鎌倉街道も、所謂、交通ラッシュで空気が相当汚染されている。けれども大学のキャンパスは恰も砂漠の中のオアシスの感がある。殊にキャンパスの焦点とも云うべき「名教自然」の碑は、嘗てこの学園に学んだ方々はもとより、此処で教鞭をとった私共や、この学園を中心として発展して来た町の住民に至るまで、等しくこの偉大なモニュメントに強い愛着を感じないものはいないであろう。この工学部も常盤台の方へ移転することになっているが、「名教自然」の碑は何処へ行くと尋ねる人がいる。丁度「クオバディスドミネ」と問うた昔の聖者の言葉のように、私の耳からは仲々消えない。

「樅の木は残った」と同じように「名教自然」の碑は必ず残る。この弘明寺の地に。と私の心は常に叫んでいる。

（昭和四八・一一・一〇　横浜電化会会報）

煙洲先生と私

――これは昭和五十五年十二月二日、六郷会の第三十回総会における講演です。――

私が初めて先生にお目にかかりましたのは、確か、大正十二年三月末の頃だったと思います。

千葉県立成東中学校から神奈川県立商工実習学校に転任になりました時で、商工の校長室でした。私の眼に映りました先生の風貌は、今日、横浜国大工学部の会議室に掲げてあります、松岡画伯描くところのあの肖像画のそれでありました。血色の良い、闘志を内に秘めた、潑溂たる中に、慈父のごとき温顔が印象的でした。

わずか一年三ヶ月という短い経験の英語教師の自分でしたが、この先生の下でなら何とかやれそうだという安心感を抱きました。

前世からの因縁とでも申しますか、横浜高等工業学校が開校されました大正九年の四月四日（この日は私の誕生日）に、私は細井多美と結婚して、蒔田の英和女学校（今の成美学園）の

丘の麓で世帯を持ったのです。

当時は、お参の宮から弘明寺にかけて、見渡す限り田圃の埋立地でした。

毎日新聞横浜支局が昭和三十二年十一月十五日に発行しました「横浜今昔」という本の中に、三無主義、すなわち無試験、無採点、無賞罰と題して、一文を鈴木先生が寄稿されております。先生が八十六歳の時の文章です。その冒頭に、「市電は今の通りよりもう一つ井戸ヶ谷寄りの裏通りの畑や池の間の細い道を走っていた。学校の前から弘明寺観音に出る道も、道中こそ今とたいして変らない広さだったが、人の行き来はほとんどなく、美しく咲きそろった桜並木がいたずらに花を散らせていた。家といえば蒔田、井戸ヶ谷の花街に通う芸者の家が二、三十軒あっただけで、草のおい茂った寂しい所だった。」とあります。当時の模様が髣髴として眼に浮かんで参ります。

さて、私が商工の教諭になりました年の九月一日には、御承知のごとく、関東の大震災で横浜が焼土と化しましたが、その数ヶ月前に、高工の講堂で有島武郎氏の講演がありました。その時、私もこれを聴講させて頂きました。演題は「ハムレット型とドン・キホーテ型」という、欧米ではしばしば取り上げられているテーマでした。つまり、懐疑的で行動力の乏しい近代人の典型と、猪突猛進、思考力に欠けた楽天的な人間のタイプとの対照でした。

この講演は非常に好評でした。それから間もなく、この純情の作家が軽井沢の別荘で、雑誌の婦人記者、波多野秋子と情死事件を起こし、世間を驚かせました。

最近、文芸界では有島ブームで、その全集が評判になっておりますが、彼は、御承知のごとく、北大の出身で、クラーク博士のキリスト教の感化を受け、アメリカに留学して、哲人エマスンに影響されたワルト・ホイットマンの詩を研究し、特に「草の葉（ザ・リーヴス・オブ・グラース）」を愛誦していました。この詩は、ルネッサンスの本質である肉体の解放により、自由を謳歌する新興国アメリカを象徴するものでした。

わが国の批評家の中には、ホイットマンの詩は、きわめて不道徳、卑猥なものとして、これを軽蔑する輩がいましたが、高山樗牛は、ホイットマンの詩を読んで劣情を抱く輩はこの詩を読む資格なしときめつけています。

有島さんは、一時北大の助教授として学究の道を択びましたが、作家に転向しました。彼の処女作「或る女」をお読みになった方もあるでしょうが、あの女主人公葉子のアメリカ航路汽船の事務長倉地との情事は、当時、読者を驚かせましたが、今日から見れば何でもないものだったのです。終戦後、例のD・H・ロレンスの「チャタレー夫人の恋人」（一九三八年）が問題とされ、裁判沙汰になりましたが、今日では単なるセックスの問題としてではなく見直され

るようになりました。

それはさておき、有島さんが独断で、北海道の広大な所有地を開拓農民に開放したあの人道主義的行動は、ロシアの文豪レオ・トルストイの影響だったのでしょう。

わが国のキリスト教が、前に申し上げたクラーク博士の影響の下に、新渡戸稲三先生や、内村鑑三先生を生んだように、同志社の新島襄先生がアメリカに学んで、キリスト教的教育をわが国にもたらした功績は多大なもので、社会党の生みの親、安部磯雄先生も、その流れを汲んだ一人です。安部先生が日本の学生野球の父として仰がれておりますのも、キリスト教精神に根ざしたフェアプレーを第一に尊重なさったからです。こうした意味で、煙洲先生もまた、同志社の新島先生の流れを汲んだ一人と言えましょう。先生が同門の徳富蘇峯先生を尊敬されて、名教自然碑にその撰文を御依頼になった経緯からも、それが窺われます。

煙洲先生が同志社を卒えて熊本の第五高等学校に赴任され、内村鑑三先生の後任として英語を教えられたというエピソードは、内村さんの高弟であった矢内原東大総長も御存知なかった秘話であります。

ここで自分のことに話を移しますと、あの関東大震災のありました九月一日には、ちょうど根岸の不動下に住んでおりましたので、根岸の芝生（しばふ）にお住いの先生のお宅を、早速お見舞した

ことを覚えております。

ところで、この震災は私自身にとりましても、一つの転機となりました。と言いますのは、自分が英語教師として、はなはだ未熟であることを自覚して、翌年一月十六日に生まれたばかりの長女恵美子と家内を信州の叔母のところに預け、米英への留学に出かけることを決意したからです。わずか一年しか勤務出来なかった自分の非礼をお詫びするために先生のお宅に伺いましたところ、帰朝したらまた来て下さいとの温いお言葉と激励とを頂いて帰宅しました。その後間もなく、文部省の命令で御出張（留学）になる数学の安川先生の送別会が銀行集会所で開かれました時に、私の送別をも兼ねて下さいました時は、本当に感激しました。

私は安川教授の後を追うように米国に渡りましたが、シカゴ大学ではほとんどお目にかかる機会もなく、先生は一足先に、ロンドン大学の方へ出発されました。ロンドン大学では、安川先生は、統計学の世界的権威カール・ピァスン教授の下で研究され、私は、音声学の第一人者ダニエル・ジョーンズ教授の音声学教室で、基本的なキングズ・イングリッシュの勉強をしました。

その頃、すでに、私は父の健康があまりすぐれぬということを聞いておりましたので、予定より早く帰朝して、大正十四年の七月、再び商工の教壇に起ち、英語の主任として、発音記号

の宣伝とスピーチの演習に重点を置いて指導しました。また、野球を生徒と一緒に楽しむうちに、野球部長を引き受けることになりました。商工のティームが県下の雄Y校を初めて破って、優勝候補の一つに数えられるようになりました時は、自分も満足でした。

また、昭和二年、神宮球場の起工式に参加し、当時、摂政の宮であらせられた今の陛下から、金一封が御下賜になり、それで造りました摂政杯争奪の決勝戦で慶応普通部を破り、その賜杯を横浜に持ち帰り、煙洲先生を囲んで記念撮影をしましたが、その時、私も得意でしたことを覚えています。

昭和四年九月十一日付で、横浜高等工業学校教授を拝命して、英語教師の傍、野球部長を二年、籠球部長を三年、生徒主事を前後八年勤めました。煙洲先生は、私のような駈け出しの教授に、以上のような修業の機会を与え、自覚自治の精神をたたき込んで下さいました。

煙洲先生は御承知のごとく、昭和十年に御退官になりましたが、その後も何かと御鞭撻を頂きました。

昭和十二年十月に、先生が御出版になった「名教自然」を、最近再読いたしまして、今更ながら、この偉大な教育者の足跡を顧みて、驚嘆するばかりでした。先ほど引用しました「横浜今昔」の中で、「試験も賞罰もない自由な状態で、すべては学生の自覚に待つわけだが、私生

活の上ではいざ知らず、勉強そっちのけで遊びにふけるといった学生は全くいなかった。専門の学問の他に音楽、文学、哲学と、それぞれ好むところに身を入れる者もあって、学生のひとりひとりがその様子といい、人間そのものといい、今時の学生とは比べものにならないほど個性にあふれていた」とおっしゃっています。

先生は、自由教育の本体は言葉や文章では表現出来ない、自由教育の真諦は行であると言われています。教育の効果は、自ら体験、体得して、自悦自足するの外はない。自由教育の大眼目は自覚教育で、訓練は生徒自身が工夫すべきもの、すなわち、学校は啓発し、生徒は自治すべきものであると教えておられます。また、我校は単なる職業教育に堕することなく、国家の逸材を造るをもって念願としていると説かれています。そして、光の人格を有する政治家、真に力強い人、私どもが安心しきって任せることの出来る政治家ですが、今日では、そうした人物は暁天の星のごときもの、否、彗星のごとしと嘆いておられます。先生のおっしゃる自悦自足というのは、英語で言う Self-contentment のことで、「足るを知る者は富に優る」(Content-ment is better than riches) とは、正に至言ですね。

また、「古人師あり」と言って、学校卒業後も、人は偉人君子の教えより学ばねばならぬと説き、学校時代の詰込主義、百貨店式教育では、天禀の創造力もかえって消磨してしまうと憂

いておられます。これこそ名教自然と言うのでしょう。

先生は皇室崇拝の念から、戦時中、六ツ川の邸内に東郷神社を祀られて、朝夕、これに祈願し、己の妄念を打ち払うことに努められました。これが、すなわち、「思無邪（おもいじゃなし）」のモットーです。この無私の境地こそ、仏教も、キリスト教も包含するインターナショナリズムだったのだと思います。

私のごとき浅学菲才の徒が、この学園の教師の一人として、どうやら終りを全うし得ましたのは、ひとえに、この煙洲先生の偉大な抱擁力と御教訓のお蔭であると信じております。

最後に、先生は、出所進退の実に立派な方でした。その先生が御退官の際、お別れの言葉としてお述べになった、昔の兵法の教える「疾きこと風のごとし」、また、後に残る者に対して、「静かなること林のごとく」であって欲しいと希望されました。われらが恩師の、このお心の籠ったお言葉をもって、今夕の私の講演を終ることにいたします。御静聴を有難うございました。

私の履歴書

――この講演は、昭和五十六年五月二十七日第四百五十二回の煙洲会で行ったものです。――

俳聖松尾芭蕉が、「他人の短を言ふこと勿れ、己が長を説くこと勿れ」という座右の銘を前書として作ったのが、「物言へば唇寒し秋の風」という有名な句です。

また、論語に、「駟不及舌（しもぜつにおよばず）」という名言があります。「駟」というのは四頭曳の馬車のことで、言葉は一度口から外へ出ますと、四頭曳の馬車で追いかけても追いつかないというのです。それで、私も後になって、「しまった」と思うことがよくあります。

とにかく、私の頭脳のコンピューターも、そろそろ修理がきかなくなりましたので、記憶違いもあろうかと思いますので、あらかじめお断り申し上げておきます。

今夕は、「私の履歴書」という題でお話することになりました。履歴書という言葉は、英語で Personal（パーソナル） history（ヒストリー） と言いますが、ラテン語で、Curriculum（カリキュラム） Vitae（ヴァイティー） と書いたりします。こ

のカリキュラムという語は、ローマ時代の戦車（チャリオット）の意であり、また、その戦車競走のコースの意味にもなるようです。

そのような意味で人間の生涯を考えますと、人間は馬車馬のようにそのコースを駈け廻って、遂には死んで行くような哀れな存在とも言えます。そして、その履歴書の最後に、「賞罰なし」「右の通り相違ございません」と書きます。この誓文は、人間同士の約束事で、恐らく神様の前では通用しないでしょう。所詮、人の一生は罪と罰との人間模様を描いたドラマであります。罪と罰はアダムとイヴの遺産と言ってもいいでしょう。

最近シルクロードという言葉がしばしば聞かれますが、「西遊記」の昔から東西文化交流のルートとして有名で、私共には馴染深いものであります。

さて、横浜が開港され、生糸が海外に輸出されるようになり、上州や信州から横浜へと運び出されるルートは、文字通りシルクロードでありました。

明治の末から大正の初めにかけて、京浜地区で活躍した実業家に、根津嘉一郎とか若尾幾造という人がいました。彼等はいわゆる甲州財閥でした。特に若尾は横浜の野毛山に豪壮な邸宅を構え、また、根岸台には海庵という立派な別荘を建て、大正の初めに高貴な方をお招きするというので、金六百万円を投じて、その大広間を改築したと聞いております。

横浜開港の当初から、上州、信州、甲州等から続々と人が横浜に集まるようになりました。私の祖父竹内竹蔵もその一人で、信州下伊那、天竜川左岸、喬木村の酒造業、塩沢家の出です。父竹次郎は竹蔵の二男で、明治元年、横浜の馬車道で生れました。生粋の浜っ子です。

祖父は普請道楽で、市内に数軒の寄席を建てました。屋号は丸竹と言い、席は吉田橋脇の富竹、伊勢佐木町通りの新富、賑町の富松、松影町の万竹等でした。私の生家は新富亭でした。本籍は伊勢佐木町二丁目二十四番地でしたが、階下の商店は松ヶ枝町三十二番地で、故六代目三遊亭円生師の名著、「寄席切絵図」の中にもありますように、出演者宛の手紙はこの松ヶ枝町三十二番地になっておりました。

今日では、伊勢佐木町通りは一丁目から七丁目までありますが、大正時代までは、伊勢佐木町は二丁目まで、松ヶ枝町は一丁目だけ、オデヲン座、喜楽座、賑座（後の朝日座）は賑町一丁目で、賑町二丁目の次は長島町でした。長島町は今日の阪東橋付近です。

少年時代の私は腕白小僧で、悪戯をしてはよく母親から叱られたものです。悪戯の罰として、モグサとお線香でお灸をすえると脅かされると、さすがに強情な私も降参しました。

当時は、どこの家庭でも躾が喧しかったようです。先程の悪戯の話ですが、新富横町の駄菓子屋をボイコットした時、その店の婆さんに学校まで捩じ込まれてびっくりしたことがありま

した。この時は家の方へ直接苦情が持ち込まれなかったので助かりました。

過日、弘明寺の観音通りへ買物に出かけようと途中まで来ますと、パラパラと雨が落ちて来ました。それで傍らの公衆電話のボックスに入って、娘に傘を持って来るように伝え、その脇の屋根のあるバス停のベンチに腰を下して待っておりますと、帽子を被った妙な婆さんが来て、隣に坐り、こんな風に訴えるのでした。「近頃は、家庭の躾がなっていませんね。憲法を改正するんでしたら、ぜひ、教育勅語を出して貰いたいものです。でないと困りますよ。家庭では子供が親に背き、学校では生徒が先生を殴る始末、困ったもんです」と、私はただ、頷くだけでしたが、最後に、自分の頭を叩きながら、「会津が戦に敗けて御維新となり、散切り頭を叩いてみたら文明開化の音がする」と歌い出したので、何という妙な婆さんだろうと、びっくりしました。恐らくNHKの「獅子の時代」でも観たのでしょう。ちょうどその時、磯子行のバスが来たので、その婆さんは、あわててそのバスの方へ飛んで行きました。

昔から晴耕雨読と申しますが、晴天には、今日の京浜急行、日の出町駅の裏山（当時は陣山と称した）だとか、南太田の三春台、関東学院の丘（兵隊山と呼んでいた）へ遊びに行ったり、お参の宮付近の田圃でメダカを掬ったりしました。雨天でも、新富の二階は約百畳敷の広さがありましたから、スポンジボールでキャッチボール位は出来ましたので、私は助かりまし

た。また、三階に近所の子供達を集めて勉強の真似ごとをやりました。

この習慣は、確かに小学時代の恩師関根源三郎先生の感化によるものでした。先生は体育の時間に、晴天ですと野球、雨天になると、西川春洞流の書道の稽古、更に、補習授業では古典の手ほどき、「太平記」の俊基卿の東下り等がそれで、この「太平記」の道行きは箏曲「雨夜の月」として有名で、この演奏は、今日亡妻を偲ぶ思い出の一つです。

中学（神奈川県立第一横浜中学校、通称神中、今日の希望ヶ丘高校）の二年になると、運動会の学年対抗の選手に選ばれて八百米を走りました。好きな野球ではありましたが、野球部には入らず、有志の連中でＡＢＣというクラブを組織して活躍しました。勉強の方も運動とバランスがとれるように段々と身を入れるようになり、寄席という環境のハンデを克服することが出来るようになったのは学校と校友のお蔭でした。

神中の上級に進むに従い、アメリカのプロ野球に関心を持つようになりました。そしてスポールディングのルールブックなどによって、米国野球の消息を若干知るようになりました。たまたま慶応義塾大学野球部のマネジャー（？）だった直木松太郎氏がそれを翻訳し、直木のルールブックと呼ばれて非常に好評を博しました。余談になりますが、近頃、学生が Spalding since 1876 と記した鞄を持っているのを見かけて、今昔の感にたえないのです。スポールディ

ングは明治九年の創立ですから、手前より二十歳年長ということになります。

大正二年の秋、私が五年生の時、慶応が招聘した米国プロ野球の紐育ジャイアンツがマッグロー監督に引率され、シカゴ・ホワイトソックスを同伴して、来日しました。そのエキスヒビション・ゲイム（模範試合）と、連合軍対慶応の二試合を行った時、兄（その年、塾の理財科に入学した）と一緒に、三田綱町の運動場で、それを観た印象が未だに鮮かです。

従来、ジャイアンツのファンだった私は、特にエースのクリスティ・マッシュースンが大好きだったので、彼の不参加は私を失望させました。しかし、ホワイトソックスの中に米国野球のＭＶＰ（最優秀選手）のトリス・スピーカーという中堅手が一枚加わっていたことは嬉しかった。

この時、米軍の打撃練習で、打球がポンポン隣の蜂須賀侯爵邸に飛び込んでしまうので早々にその練習を止めましたが、当時のグラウンドは非常に狭まかった。エキスヒビション・ゲイムではさすがに模範試合にふさわしいものでしたが、トリス・スピーカーの強肩と正確な返球が、ホーム寸前で、三塁から突入する走者を刺殺しましたのには驚嘆しました。

このスピーカーは当時、米国少年のアイドルで、大統領の名を知らぬ者も彼の名を知らない者はなかったそうです。このスピーカーの美技などは、近頃のプロ野球の助っ人（外人）には

ちょっと見られない芸当でした。

慶応対米国連合ティームとの試合は、スコアの十七対三が示すように、全く問題になりませんでした。と言うのは、九回裏、慶応の打ち終いに、打順は九番から一、二番という好打順でしたが、三者三振、それも九球で片付けられ、カスリもしませんでした。この時、マッグロー監督は九番打者がボックスに入る前に、ベンチからやおら起ち上って、何やらピッチャーに合図をしました。「あっさり片付けろ」とでも言ったのでしょう。この投手はスコットという全米投手のランキングで三十番目とのことでした。それで、私はますますクリスティ・マッシュースンの来日出来なかったことが残念でなりませんでした。

早大の英文学科時代には、劇とか小説に興味を持ちましたが、熱中するまでには至らず、少年時代から押川春浪の冒険小説とか「実業の日本」という雑誌を愛読して、海外発展の夢を抱いていましたので、英会話とか商業通信（コレスポンデンス）などの実用英語の単位を別にとりました。当時英文学科の学生で、そんな単位をとる者はほとんどおりませんでした。英会話は高杉滝蔵教授という、安部先生の次に野球部長になった方で、大隈侯が外国からの賓客を迎えて演説される時、常に同時通訳をなさるヴェテランでした。この先生は、私を非常に可愛がって下さり、私がシカゴ大学留学の時、総長のジャドスン先生や、昔早大の野球部が初めて米人コーチを招聘した

時、来日したシカゴ大学の元ピッチャーのメリーフィールド氏へ御紹介を頂きました。メリーフィールド氏は当時神学部の教授で、先生の御授業が終ると、早速その教室へ行ってお目にかかり、野球の話などをしたことを覚えています。

コレスポンデンスの武信由太郎先生は元ジャパンタイムズの主筆だった英文の達者な方で、研究社の「英語青年」の和文英訳欄で高等科を担当され、同社の和英大辞典を最初に編集されました。また勝俣銓吉郎先生は本県（神奈川）の御出身で、その著「英和活用大辞典」は不朽の名著で、先生が若い頃から御苦心になったポケットブック・ハビット（英語の慣用句を丹念に書き抜いて集めた）による収穫で、私共英語教師はもちろん、商社で仕事をする連中が英文を書くのに必携の参考書です。

こうした立派な先生方の御指導を受けて、大正七年七月卒業。同年十二月一日、一年志願兵として、第一師団輜重兵第一大隊に入隊、翌年十一月三十日除隊。

大正九年四月四日細井多美と結婚。と同時に三井系の小倉貿易株式会社に入社。営業はマニラ麻と支那麻の輸入で、マニラ麻はキャビテとかダバオが主産地、支那麻は漢口（はんかお）、上海が集産地で、マニラ麻はブリ網のような魚網、支那麻は主に蚊帳などを造るための原料でした。私は受渡係を命ぜられ、税関へ行ってインヴォイス（商品の送り状）を調らべたり、上屋で出入荷

の点検をしました。

大正十年五月、世界的不況のため、小倉貿易を退社して浪人となりましたが、間もなく東京築地のジーメンス・シュッケルトという世界的に有名な独逸の電気会社に入社、英訳係となりました。この会社は、御存知でしょうが、大正三年シーメンス事件という海軍の収賄事件のため、時の山本権兵衛内閣を退陣させた評判の会社でした。ここに留まることわずか一ヶ月で、一年志願兵の第二次勤務で、三ヶ月召集されましたので退社しました。

この第二次勤務が終ると、大正十年十二月千葉県立成東中学校教諭となり、初めて英語教師として教壇に立ちました。生徒も比較的良く勉強したので張り合いがありました。ただ郷里の横浜を離れて、早朝、九十九里の潮騒を聞いたり、夜のしじまに、銚子から千葉への最終列車の汽笛を聞くと一抹の淋しさを覚えるのでした。

大正十二年四月、神奈川県へ出向を命ぜられ、県立商工実習学校教諭となり、鈴木煙洲先生の自由啓発主義教育に共鳴して、新しい学校の歴史と校風の樹立に努力しました。

大正十二年九月一日、関東大震災により、横浜市が焦土と化し、前途の暗澹たる際、自分自身も教師としての未熟を覚り、基本的に勉強がしたく、商工を辞して、米英へ遊学、シカゴ大学の夏期講座（サマーエキステンション）を受講し、さらにロンドン大学で音声学の基本を学び、帰朝後、再び商工の教

論となり、発音記号の普及と朗読法に重点を置いて生徒を指導しました。その甲斐あって、生徒の中から県下のスピーチ・コンテストで優勝する者を出したことは、自分にとって嬉しいことでした。また商工の野球部長を二ヶ年勤める間に、県下の雄Y校を破って、優勝候補の一つに数えられるようになりました。

昭和四年九月十一日付で横浜高等工業学校教授となり、水野常吉先生の後任として、英語教授の傍ら、前後八ヶ年生徒主事をつとめたりしましたが、若き日の私にとりまして、野球部長としての二年間は、何と言っても印象の深いものがありました。

当時、対高商の野球定期戦は、横浜市を二分する一種の祭典（フェスティヴァル）でしたが、あらためて詳しく申し上げるまでもありません。白熱したあの定期戦で、当時NHKのスポーツアナとして有名だった松内則三さんがネット裏から実況放送をしましたことは、両校の球史を飾るものでした。

高商が独逸語で、アイン・ツヴァイ・ドライと叫んで挑戦すると、わが高工の応援団が英語で、ヒア・ウィー・ゴウと応ずる。「さあ行こうぜ」と言うのですが、これは私がたまたま紐育に滞在中、ジャイアンツのポローグラウンドで声援するジャイアンツファンの掛け声を、応援団に伝授したものです。

両軍の応援団員が扇子を持って踊る風景は、今日のチアガールを顔色なからしむるほど、活気に溢れたものでしたが、一方、町の声として、国許の父兄がこの扇子を持って踊るのを見たらさぞ嘆くであろう。せめて扇子を持たずにやったらと抗議する者がありました時に、私は「扇子なしではねー、ナンセンスですよ」と答えたことを覚えています。

私が野球部長時代、両校のコーチは共に、母校早大野球部の黄金時代、シカゴ大学のナインを破った飛田監督の下で鳴らした名外野手、中堅の氷室君（後に近鉄の監督になった芥田氏）と、右翼手でホームラン打者の河合君次君、前者は高商、後者がわが高工のコーチでした。しかも、この定期戦の主審をつとめたのがY校出身の瀬木嘉一郎君という、前記両君と共に左翼を守り、早大の三羽烏と称せられた地元の人でしたので、新聞の特種（とくだね）として、この定期戦の景気を一層盛り上げました。

昭和七、八年の定期戦は、高工の健闘も空しく、一勝一敗の後、決勝戦に敗れて涙を飲みました。それだけに忘れ難い思い出となっております。

昭和八年の夏、横浜高工は初めて海外遠征を試み、朝鮮の釜山を皮切りに、大邱、興南、平壌、満洲に入って、撫順、奉天、大連と転戦、さらに青島へ渡り、都合十一回戦い、七勝四敗の成績をもって帰朝しました。その中で、当時都市対抗野球で優勝し、黒獅子旗を海の彼方に

持ち去ったので有名になった、大連実業のエース谷口五郎君（野球殿堂入りした早大出身の名投手）を打ち崩して勝利を収めた試合が、特に印象的でした。それと大連滞在中、旅順の戦跡を訪れ、二〇三高地の頂上に立った時は、往時を偲び、感無量でした。

昭和十四年の夏、七月から八月いっぱい、本科生五名を引率して、文部省主催の興亜勤労報国隊に参加し、わが将士を慰問のため、北支蒙疆を旅したお話はここでは割愛致します。

終戦直後、神奈川県の委嘱を受けて、米国駐留軍で働く日本人要員（当時県下には約五万五千人程おりました）に対して語学加給試験を行いました時、海外から戻って来ました外交官の連中と一緒にその試験官となり、ディクティションを担当し、十五ヶ年間お手伝いをして、内山知事から表彰状と銀杯とを貰いました。

昭和三十七年三月いっぱいで、横浜国大を退官しましたが、その二年前から戸塚の日立京浜工業専門学院の講師となり、今日に至っております。非常勤としては横浜市大講師を十数年勤めました。

昭和三十九年から四年間横須賀の神奈川歯科大学教授となり、その初年度には数学の長老安川数太郎先生と御一緒しました。先生は手前よりお年が一廻り上でしたから、現在御存命でしたら、本年九十七歳になられます。

また早大時代の恩師坪内士行先生とも週に一回お目にかかりました。先生は逍遥先生の甥で、NHKの連想ゲームのレギュラーメンバー坪内ミキ子さんの御尊父です。早稲田の英文学科を卒業後、米国に留学され、引続き英京ロンドンに行き、当時イギリスの団十郎とも言うべき沙翁劇の名優ヘンリー・アーヴィングのところで裏方のごとき仕事をして、演劇の勉強をなさいました。その時、ロシアの文豪ドストエフスキーの傑作「罪と罰」という小説を劇化した脚本をアーヴィングが所持しておりましたが、それを保管していた黒人のボーイに幾らかつかませて借り出し、それを翻訳して「早稲田文学」に発表して評判をとりました。私は、先生から、御帰朝早々、アーノルド・ベネットとノブロック（当時保険社員だったとか）共作の「一里塚（ストーン）」というドラマを教わりました。これは世代の移り行く英国の家庭を描いたお芝居で、当時ロンドンではロングランの当り狂言でした。士行先生は御自分でも芝居がやりたくて、大正七年の秋、帝劇でハムレットを演じました。オーフィリア役は帝劇第一回卒業の女優村田嘉久子さん、叔父クローディアス王は加藤精一という新劇のヴェテランで、あの女優加藤治子さんのお父さんでした。侍従長のポローニアスと第四幕で墓掘りの男を演じたのは東儀鉄笛という宮廷の雅楽をやる人で、これがなかなか好評でした。東儀さんは、御承知と思いますが、「都の西北」の作曲者で、歌詞は相馬御風という新潟県出身の詩人で、その息子さんは確か、わが

造船科の出身だったと思います。かつては宝塚の総監督だった士行先生も今は九十歳を越す御高齢だそうです。

昭和四十三年、旧横浜高工の裏山に創立された神奈川県立外語短期大学教授を拝命して同五十一年三月に退官するまで、八年間勤めました。その間、昭和四十八年の夏、神奈川県から出張を命ぜられ、イギリス、アイルランド、フランス、スペイン、イタリー、スウィス等の諸国へ視察を兼ねて観光旅行をしました。この時は、妻多美、長女恵美子を伴った三人旅でした。

先程、ドストエフスキーの「罪と罰」という小説が話題になりましたが、あれはラスコルニコフという大学生が金貸しの婆さんを殺す話です。凡そ人生というのは罪と罰の人間模様を描いたドラマで、子供の時から人の一生は、アダムとイヴの遺産を相続して、罪と罰で彩られております。

毎年十一月の酉の日、昨年は八日と二十日でしたが、その日には酉の市があります。私の少年時代には横浜真金町の遊廓内に大鷲（おおとり）神社というのがありまして、その酉の市は大変賑ったものです。しかし、私共の小学校（伊勢佐木町の裏で、現在は吉田中学校）はその真金町に近かったので、そのお祭に行くことは厳禁されていました。それで、もしそこに行ったことがバレルと、懲（こらす）という漢字を三千も書かされました。懲というのは字画が多いので、それを三千も書

かされますと閉口しました。

真金町には貸座敷、つまり、女郎屋が軒をつらね、夜になると厚化粧の女郎が張店（はりみせ）の格子の中にずらりと並んでいる。これがお芝居ですと、さしずめ艶やかな吉原の仲の町、正に不夜城といった所、「助六」とか「鞘当」などという狂言がそうです。先代の高麗屋松本幸四郎と、成駒屋の中村歌右衛門の当り狂言に「籠釣瓶（かごつるべ）」というのがあります。佐野次郎左衛門という男が召使を連れて吉原の仲の町で花魁道中（おいらんどうちゅう）を見る。その中で八ッ橋花魁の美しさに見惚れて、うっとりとなるあの序幕は実に明るい綺麗な場面です。ところが、籠釣瓶という銘刀が遂には血を見なければおさまらぬ結果になります。それは、次郎左衛門が八ッ橋を身請けしようと、郷里から金を工面して来るが、八ッ橋には二世を契ったマブがいて、結局騙まされていたことが分かり、八ッ橋を殺すということになります。ここに罪と罰の人間模様が描かれています。

自分の教師としての生涯を回顧しますと、大なり小なりこの罪と罰の連続模様だったようです。とかく、教師というものは他人の短をいうことを批評と心得、つい己の長を説きたくなり、後で「しまった」と思うことがよくあります。学生の巧妙な牽制球に誘い出され、野球漫談などをやって、授業時間を奪われるなど滑稽千万でした。教師としてはえらいチョンボでした。そうしたエラーを繰り返しながら遂に私も人生の終着駅に近付きました。

英語の授業の外に、バイブル・クラスで聖書を読むと共に、実際に英語を聴いたり、話したりする英語会、すなわちＥＳＳの活動は、教師と学生との緊密な関係をもたらしました。また、造船科とか機械科の学生有志による自発的奉仕活動としての日曜学校が開設され、彼等が学校付近の少年少女達を指導することになり、私は四年間拙宅を提供しました。この時の私共夫婦の感激は言葉では言いつくせません。これが奇縁で私共夫婦はキリスト教徒になりました。これはもちろん、上よりの啓示によるものではありましたが、純真な学生活動が導火線になったことは事実です。

私の一生で、この心身を支えてくれた趣味は演劇とスポーツ、特に野球でありましたが、演劇は自分の研究とも関連して多岐に亘りますので、ここでは割愛致します。

趣味としての野球は、小学生の頃からでありますが、野球に関する書物で、都市対抗野球の生みの親とも言うべき橋戸頑鉄氏の「緑蔭叢話」を私は愛読しました。これは米国プロ野球の裏話といったもので、種々な挿話が記されています。実は、この本には種本（たねぼん）があるんです。それは紐育ジャイアンツのエース、クリスティー・マッシュースンの「Pitching in a Pinch（ピチング・イン・ア・ピンチ）（危機における投球法）」という書物で、ピンチに臨んで、彼独得の決め球（当時審判泣かせと言われた）フェード・アウェイという球で、打者を料理する話です。苦手に対して無理をせず、敬

遠して次打者を牛耳る投法で、その球は恐らく今日のスライダーとかシンカーの類でしょう。私はジャイアンツの中で、特にこのマッティが大好きでした。彼は当時としては稀らしい大学（バックネル大学）出で、同僚からも紳士として尊敬され、彼がダイヤモンドに姿を現すと、選手連はスラング（俗語）を控えたそうです。

こうした私の趣味はどうやら幼稚な私の初恋の痛手を忘れさせてくれました。

学生時代の果敢ない夢も醒め、幸いにも最愛の妻を迎え、幸福な家庭に恵まれ、それに、偉大な抱擁力の持主、鈴木煙洲先生のような恩師に巡り逢い、理解ある友人知己の御援助を得て、どうやら大過なく今日を迎えることの出来ましたことを感謝しております。

そうした御理解のある方々によって、昨年十一月には拙著「寄席の息子と英文学」の出版記念会を催して頂きましたことは、私にとり破格の光栄でした。ここに改めてその御厚情に対してお礼を申し上げ、これで今夕の話を終ることに致します。

御静聴、真に有難うございました。

思い出の記より

1　誕生から小学生時代

私は明治二十九年（一八九六）四月四日、横浜伊勢佐木町二丁目二十四番地、寄席新富亭主人、竹内竹次郎の二男として誕生した。

伊藤博文内閣の時代、日清戦争終結直後、通商条約の調印とともに、一応、平和が回復した年である。後年、健康診断のため、幾度もご厄介になったレントゲンが、初めて輸入された年でもある。

この年、横浜にペストが発生したのは、棉花の輸入税廃止に伴う、その輸入増加によるものではなかっただろうか。この年はまた凶年で、死者の数も少なくなかった。樋口一葉が二十五歳の若さで亡くなっている。

幼い私の眼に焼きついて残っているのは、明治三十二年八月十二日（一八九九）の関外の大火、紅蓮の炎である。今の曙町付近からの出火は、伊勢佐木町をはじめ、多くの町を烏有に帰した。叔母の背に負われて、わが家が猛火に包まれるのを振り返りながら、亀楽煎餅の横から鶴の橋を渡り、寿町の叔父の家に避難した時の恐ろしさはいまだに忘れられない。

叔父の家にたどり着くと、ジャッキーという飼犬が激しく吼えるのが怖かった。自分はこの時、まだ、「吼える犬は嚙まぬ」（Barking dogs do not bite）というイギリスの格言をもちろん知るよしもなかった。

明治三十四年（一九〇一）、大岡川に通じるチャネル（水路）に沿った万代町（ばんだい）の幼稚園に通っていた頃、女の子達とお手々つないで遊戯をしたことを覚えている。兄が寿小学校からの帰途、これを見かけて、家に帰ると、「お前、いいなあ」とよく冷かされた。

この年の暮、十二月十一日から向こう五日間、新富亭で大演芸会が催されたが、この時のビラの発見については、タウン誌「浜っ子」昭和五十四年五月号に「新富亭のビラ」と題して詳報した。

また、この年、教育の先覚者、慶応の福沢諭吉先生が六十八歳で亡くなられ、また、後の早

大教授、学生野球の父と仰がれた安部磯雄先生達が社会民主党を結成している。

その翌年、私は吉田尋常高等小学校に入学した。この年、日英同盟が締結され、イギリスでは、六十年の長きにわたるヴィクトリア女王の時代が終わり、エドワード七世の御代となった。わが国では、自由の精神と学問の独立を叫ぶ大隈伯の早稲田大学が創立。またこの年、明治詩壇の革新をはかり、その生命を燃焼し尽くした正岡子規が三十六歳で逝去している。惜しむべきこの天才は、今日隆盛を極めるベース・ボールの開拓者でもあった。

さて、吉田小学校の校長は、確か、後に、三留義塾を創められた三留先生であったと思う。校舎は、土蔵造りの本館と、木造平屋の分教室とからなっていた。この分教室は後の本願寺の境内にあたる所で、教室の窓が紙張りの障子のため、強い雨の日や、雪の降り積もる時には、その障子が濡れるのであった。

ここでの友達は、ほとんど記憶にないが、ただ一人、真金町（まがね）の貸座敷Fの娘さんで、お千代さんという子の印象だけが明瞭に残っている。色が白く、大理石の人形のような滑らかな顔、聡明な眼差し、微笑が何ともいえず魅力的で、ことに雪の朝など、例の窓から差し込む日光に、その顔が一段と輝いて見えた。もっとも、私には声をかけるだけの勇気がなかった。ただ、彼女の視線がとてもまぶしかった。これも初恋なのであろうか。

翌明治三十六年（一九〇三）には、小学校の国定教科書制が公布された。鼠色のぱっとしない教科書は、この頃からであったのだろう。この年、歌舞伎の闘将九代目団十郎が六十六歳で没し、『金色夜叉』の尾崎紅葉が三十七歳の若さで亡くなっている。この紅葉の親父さんが幇間（たいこもち）だったという話を、かつて聞いたことがある……。

私が小学校三年の時、つまり明治三十七年（一九〇四）、日本とロシアの国交が断絶、遂に宣戦が布告され、その交戦状況を国民が皆、首を長くして待っていた。その頃、新富亭の隣に、新堀の正ちゃんという私より年下の友達の家で、博集堂という書店があった。この店先に、交戦の模様を伝える絵双紙が掲げられるのを、私どもは見に行ったものである。大東亜戦争の時の大本営発表くらい、実に当てにならぬものはなかったが、絵空事でもあれ、とにかく、国民はそれを見て随喜の涙を流したのである。この年、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が亡くなっている。明治三十八年（一九〇五）には、日本海の海戦。連合艦隊司令長官東郷提督によるZ信号「皇国の興廃、この一戦にあり……」は、あまりにも有名である。この決戦こそ、まさに、シーザーの「ルビコン河を渡る」（cross the Rubicon）のような乗るかそるかの一大冒険であり、その結果、ロシアのバルチック艦隊を撃滅することができた。これは、イギリスのエリザベス一世の御代に、スペインのアルマダ艦隊を、イギリス海峡に迎え、これを撃退し

たイギリスのドレーク提督に比較される快挙であった。

日露戦争は、アメリカの斡旋により、ポーツマスで講和条約が調印された。この時の日本全権大使は小村寿太郎外相であったが、この条約を不服とする国民が激昂したために、小村さんは、横浜に着くや、隠れるようにして東京に戻られた。この時の不穏な状況は、小学生の自分にも恐ろしいものであった。

また、この夏には、夏目漱石の『吾輩は猫である』が刊行されている。前記のラフカディオ・ハーンが東大講師を辞任した後、漱石が同大学英文科の学生に、十八世紀のイギリス文学を講じた。

明治三十九年（一九〇六）三月、尋常四年の課程を修了して（この時、すでに校長は稲葉先生になっていた）、高一に進む。学校は、真金町の遊廓裏に新築された第二高等小学校だった。この学校は男子ばかりで、隣に、女子だけの第三高等小学校があった。例のお千代さんの顔は、もう見られなくなった。

教室では、英語の授業がおもしろかった。小肥りの、あまり丈の高くない岡田というハイカラの先生であった。黒板によく絵を描き、単語の説明をした。

尋常四年の頃から野球が好きになった私は、昼休みを利用して、校庭（細かい砂利を敷き詰めてあった）でスポンジ・ボールで野球をやり、土、日には校舎裏手の空き地で硬球の試合をしたりした。当時、少年野球で使用したのは七号ボールとかで、一箇二十銭ほどしたと思う。もりかけ蕎麦が二、三銭、天丼の並が七、八銭の頃であったから、相当の値段であった。投手が皮の手袋といった程度のものを使用し、他の野手は皆ミットであった。しかも捕手ですら粗末なミットで、マスクなども剣道の面を代用する始末であった。

日露戦争後、アメリカの太平洋艦隊が示威運動のためか、大挙して横浜港に入港した時、水兵達はハワイに寄港できなかったので、彼等は札びら（greenback）を振りまき、拾ドル金貨（eagle）までもひけらかし、横浜市民を驚かしたことがあった。以来、この太平洋艦隊所属の軍艦が入港すると、横浜在留外人の倶楽部ＹＣＡＣのチームをはじめ、早慶等の大学チームや、Ｙ校ナインと、公園内の球場で野球試合をした。試合のできない時には、私達の学校前の空き地で練習したりした。私達が、朝、登校すると、その空き地に面した廊下の窓ガラスが割れていて、打ち込まれたボールが転がっていることがしばしばあった。

この年、坪内逍遥が文芸協会を設立。日本社会党の結成。電車の焼き打ち事件等があった。島崎藤村の『破戒』の出版によって、自然主義文学の隆盛を物語る年でもあった。

明治四十年（一九〇七）高二に進級。この年、英語の勉強のためにと、Y校の名校長美沢進先生の兼任されている横浜商業専修学校（夜間）に通った。入学試験の面接で、志願者に英語の朗読をさせて編入のクラスが定められる。私は丙組に編入され、教科書は、岸本能武太先生のチョイス・リーダーズの巻二であった。そのテキストで、怠惰な一人の生徒が、他の生徒が教科書から眼を逸らしていたと教師に告げ口したところ、「お前こそ、よそ見をしていたんだ」と叱られ、「まんまと捕まった」(He was fairly caught) という話が、いまだに忘れられない。

この頃、私は、『実業の日本』などという雑誌の海外渡航の記事や移民の話を読むのが好きであった。新富亭の隣の博集堂で、『英語の教へ』とかいう振仮名つきの入門書を買って勉強していた。商業専修の夜学は、私にとっては珍しい経験で、新しい友達もできた。正金銀行の給仕、山屋琢君を知ったのも、この時であった。冬の寒い夜、放課後、辻角で売っているホカホカとした今川焼を一緒に食べた思い出もなつかしい。横浜の市電がはじめて、神奈川と西の橋（元町の手前）間に開通し、そのチンチン電車の灯を、講談調でおもしろく語る修身の神尾先生の講話に聴き入りながら、講堂の窓から外をちらっと眺めた思い出が蘇ってくる。それと関連して、当時の横浜駅（現在の桜木町駅）前に、花弁の形をした噴水のあったことを思い出

す。冬、凍てついたその噴水の周囲を飛び回り、足を滑べらせ、中に落ちて、着物をぐっしょりと濡らしてしまい、帰宅して、母に叱られたこともあった。

新橋から横浜に着いた列車が、さらに東海道を西に行く時、機関車をぐるりと回転させる作業を、塀の下の隙間から覗いたことや、高島町から横浜駅へかけて、からたちの生垣のあったこと、また、その沿線の横浜ドックの構内を、知人の案内で見学させてもらい、昼には結構なランチをご馳走になったことなどが思い出される。ドックといえば、吉川英治氏の少年時代が偲ばれるのであるが、このドックで真黒になって働いた労働者—カンカン虫（船体の錆を落とすため、カンカン敲いたからであろう）が、一日の労働を終わって、夕方、伊勢佐木町通りを帰って来る光景を、新富亭の二階からよく見かけたものである。

この高二時代のことである。友達の一人に斉藤という歯科医の息子がいた。彼は成績も抜群で、しかも弁舌のたつ男だった。彼とは、お互いに、その家を往来する間柄であった。その年の夏、根岸の海に泳ぎに行ったことがあった。今日では乗り物の便があるので何でもないが、当時は歩いての往復である。往きはよいよい帰りは怖いで、泳ぎ疲れての帰途は一難儀であった。足の疲れはもちろんだが、お腹が背中にくっつく位になった。そこで、彼の家に立ち寄り、ご馳走になった。ご飯はお櫃にいっぱいあったが、おかずは塩辛しかない。塩辛はあま

り好きではなかったが、でも我慢してぱくついた。何杯お代わりしたか知らぬが、たちまちお櫃は空になっていた。とにかく、斉藤と私とは、そういう間柄だった。しかし、その斉藤のために、私は生涯にただ一度だけ、父に嘘をつくことになってしまった。

ある日、彼が、学校の近所に貸馬屋ができたので、乗りに行かないかと私を誘った。それで二十銭何とか都合してくれと私に懇願した。当時の私にとっては二十銭は大金である。新富の爺や（番頭の木村源三郎）に無心するのも具合が悪い。というのは、これまでに証文を一札入れて金拾銭也を借り、まだ返していない。爺やは「若旦那が将来、ご出世なさったら返して頂きます」という条件をつけていた。そこで父親だが、その時、折悪しくも、痔を患って馬車道に近い指路教会前の病院に入院していた。当時の尾上町付近には、小田原屋とか上州屋とかいう海外移民相手の旅館があったものだ。私は、ちょっと気おくれしたが、意を決して父の病室に入った。父はちょうど昼食を食べていた。白いお粥に赤い梅干が浮いていた。まず、「お加減はいかがですか」と尋ね、「実は地理の参考書が必要なので、二十銭頂きたいのです」とお願いした。父は私が見舞いに来たことを非常に喜び、別に聞き糺すこともなく、金を出してくれた。早々に病院を出たが、良い気持ちはしなかった。私には一生、この負担がかかっている。

今、こうしてペンを走らせながら、傍の壁に懸けてある父の写真に対して頭を下げてしまう。

さて、金を手にして、斉藤に逢うために例の貸馬屋のところへ行った。彼は先刻から待っていた。金を渡すと、彼は係りの男に何やら掛け合い、程なく馬に乗って馬房から出て来た。そして、私について来いと言うので後に従う。それから、馬場をちょっと離れた所で、ものの二、三分ばかり、私を馬に乗せて歩かせた。すると、今度は、「俺が乗るのだ」と、私から馬を奪い、駈け足で立ち去って行った。私は後を追いかけたがむだであった。彼の姿が見えなくなったので、私はその辺りをうろうろしていた。「金を出したのは俺なんだ」と思ってみたが、馬泥棒はそこにはいない。待ち疲れているところへ、彼が戻って来た。貸馬屋に馬を返しに行って、すったもんだやっていた。時間をオーバーしたので超過料金を払えと言われたらしい。彼は戻って、「君、超過料金を払えと言っているよ」と言う。私は恐ろしくなって、そこから逃げ出した。そんなお金がある訳がない。以来、この第二高校を修了する日まで、その貸馬屋を避けて通うことになった。親父を欺いた罰はてきめんと後悔したがどうにもならない。借金取りに追われる者の心痛が思いやられた。これで斉藤との交際は断たれた。その後、彼の消息は聞いていない。

再び水泳の話に戻るが、当時、横浜で一番人気のあったのは山下海岸の水泳場である。吉田橋（鉄の橋）の橋詰から山下海岸の水泳場行の早船が出ていた。定員十名位の小さい舟で、石川町岸を左折して谷戸橋に差しかかると、橋詰の交番の巡査が乗員の点呼をする。それから舟は右の方へと巡り、山下海岸の茶屋へとお客を運ぶ。この茶屋は、現在の港の見える丘の断崖下に造られた小屋掛けのもので、飲料水はその断崖から筧で茶屋に送られていた。この茶屋では、枝豆、しるこ、おでん等を売っていた。私の母は当時としてはハイカラで、手廻しでアイスクリームをこしらえる器具を持参したりしていた。母は若い頃、信州の天竜川で泳いだという経験から沖の方までも泳いで行き、子供の私達をはらはらさせたものである。

こうした母に連れられての海水浴行は、私達にとっては豪遊であり、そうたびたびできるものではなかった。だから、友達と誘い合って出かけたのである。伊勢佐木町から歩いて元町に行き、外人墓地を右に見ながら細い坂道を登り、測候所の前から、あの赤レンガに蔦の絡んだゲイテイ座の前に出て、右折し、しばらく行くと海岸に降りる小道があり、そこから浜辺に出る。浜辺といっても狭い所で、砂の上に着物を脱ぎ捨てると、一気に海に飛び込む。着物の番は交代で見張ってもらう。沖には外国船が悠々と航行しているのが見える。外国への憧憬は、こうした時に知らず識らずのうちに、私の心の中に潜入していったらしい。例によって、帰途

は腹ペコである。もらって来た小遣いの二銭銅貨が焼き芋八個に化けるのもこの時であった。

私が、そもそも泳ぎを覚えたのは偶然の事であった。新富横町に野州屋という旅人宿があり、横浜に大相撲の一行が来る時は、いつも十両の関取衆数名と、木村庄之助以下、行司連中が泊っていた。いわゆる定宿である。その行司さんの中に、後に鬚の式守伊之助として有名になった木村金吾さんがいた。彼はなかなか愛想のいい人で、近所の子供に相撲の手を教えてくれたが、特に、私の兄、正雄を可愛がって、一番よく教えてくれた。果たせるかな、兄は少年時代から相撲が強く、母に連れられて小屋掛けの大相撲を見物に行った折、横綱大砲万右衛門が兄を養子にもらいたいと所望され、母が大変困ったという話を聞いたことがある。その兄は、信州の飯田中学時代、断然強く、相手になる者がいなかったようである。この野州屋の息子に繁ちゃんという私よりもかなり年上の子がいて、夏になると舟を借り、自分で上手に漕ぎ、灯台局の前を通り、御用邸裏の方まで行って、漁師が仕掛けておいた粗朶(そだ)のようなものを海中から引き上げ、ぱっと突堤の上に落とすと、中から大きな蟹がぞろぞろと出て来る。繁ちゃんはそれを捕え、粗朶を再び海中に投げ入れる。

私が遮二無二もがいて泳いだのは、この繁ちゃんが突然私を突堤から突き放したためであった。

ある時は、こうした舟ではなく、御用邸内に忍び込んで裏手の突堤まで疾走し、水泳したりした。また当時、駅（今の桜木町駅）前、左手の弁天橋（県庁に通ずる）の橋詰から神奈川まで、運賃二銭のポンポン蒸気が出る。このフェリーで、途中の海上に浮かぶ忠泳館という約五百トン位の船に行く。この船の横腹には木製の浴槽がつないであって、泳ぎの未熟な者はそこに入る。すると、適度に海水が差して来て泳げる仕組。達者な人は舷側から飛び込む。暇な連中は糸を垂れて鰺釣りが楽しめるというおもしろい遊泳場である。当時極東水泳大会に優勝した鵜飼弥三郎氏が、この忠泳館の教師であった。また、久米正雄さんが学生時代に、万朝報の企画により、二人の学生が選ばれ、東西から夏休みの徒歩旅行をして、途中の風光をスケッチしたり、見聞した事を記事にまとめ、その経費まで逐一報告するというコンテストが行われた時、この久米さんの相手に選ばれたのが清水都代造君という神中の先輩。（『一ツ橋ロマンス』の著者）彼も忠泳館の常連だった。

この忠泳館に行くには、先にも触れたが、ポンポン蒸気の厄介にならねばならなかった。私が初めてこれに乗った時、「ゴウヘイ」という言葉とともに船のエンジンがかかり、ゴトゴト鳴り出した。すると、また「ゴウヘイ」と叫ぶ。私は五兵衛という爺さんはどこにいるのかと辺りを見廻したが、それらしい爺さんの姿は見えないので、変に思った。これは後になって解

かったことだが、どうやら「Go ahead」の意味らしい。

明治四十年（一九〇七）に学制が改正となり、明治四十一年（一九〇八）、再び高等一年生として吉田小学校の古巣に戻った。この年、画壇の巨匠橋本雅邦が七十四歳で没し、文人国木田独歩も三十八歳で亡くなっている。伊藤左千夫の『アララギ』が創刊されたのも、この年である。また、忘れることのできないのは、日米紳士協定によって、アメリカへの移民が制限されたことである。海外に雄飛せんとする若者には、ショッキングなニュースであった。

そして、ここでの一か年が、私にとって最も恵まれた一年となった。それは何と言っても、恩師関根源三郎先生にめぐり逢えたことである。この先生こそ、私にやる気を出させてくださった先生であった。先生は典型的なスポーツマンで、柔道は三段、上州出身の快男子で、横浜に赴任されて間もなく、川で溺死せんとした人を救助して評判になった。先生は第二高等小学校当時、教員野球チームの主将で、捕手として活躍された。また西川春洞の弟子として書道にも秀で、市内の医院の看板などに、先生の揮毫がよく見受けられた。さらに、理科の実験も上手で、他の教室にしばしば応援に狩り出されたり、英語担任の女教師が欠勤の時には、先生御自身が立派にその代役をつとめられた。

グラス内の編成では、各列に伍長を置き、その列の生徒の答案を訂正させたりした。また、いわゆる晴耕雨読の理想により、体育の時間、晴天の場合は、全員を横浜公園まで駈け足で連れて行き、クラス全体を四チームに分けて野球をやらせる。野球好きの私には、これが嬉しくてならなかった。第一チームの主将に選ばれた私は投手をやり、「中虎」という紺屋（染物屋）の息子、榊原が捕手であった。その上、私は伍長にも選ばれていた。その私の隣で伍長をしていた宇治というのが横浜ベースボール商会（伊勢佐木町二丁目裏の福富町所在）の息子だったので、ボールを彼の店から廉価で仕入れることができた。また、捕手用のミットは金四円五十銭という当時としては高価なものであったが、父にさんざんせびった末に買ってもらい、チームに寄贈した。これで、本格的なミットも手に入り、榊原は大変満足し、私も成績を上げることができた。

一方、雨の日には、春洞流の習字に熱中した。生徒は年末に自分達の作品を表装して展示したりした。

上級進学のための補習としては、別にたいしたことをやらなかったが、先生は、進学者には数学の自習をさせ、問題集を選定して勉強させた。質問が出ると、快刀乱麻、明解な説明をしてくださった。また、進学組でない連中には、日本文学の古典や初歩の漢文を教えてくださっ

た。太平記の俊基卿の東下り、「落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の桜狩」や、諸葛孔明の「出師の表」等は平常の授業で習っていた。

さて、私達の野球仲間に、弁天様の隣の羽衣座という芝居小屋の近くに住んでいた勝ちゃんがいた。私よりも年上のこの子は、関外の芸者衆を送り迎えする俥屋の息子で、腕力が強く、しかも乱暴、皆が彼のことを無手勝と呼んでいた。この無法者が、ある時友達の所へ怪文書の葉書を出した。その内容は、私が例の初恋のお千代さんと深い仲だという讒訴であった。それがある晩、親父が木戸に坐っている時に配達されて来た。親父はただ黙って、私にそれを手渡した。私はそれを読んで憤慨した。お千代さんとは何年も逢っていない。癪にさわったので、翌朝早速、先生にその葉書を提出した。もちろん、勝ちゃんは大目玉を喰った。その後で、先生は私を呼び寄せ、こんなことを話してくださった。「お千代さんという娘は大変温厚で、成績も良く、特に作文が上手ですよ」と。何のために、このような話をされたのか分からなかったが、とにかく、私の潔白の認められたことは嬉しかった。

この明治四十一年（一九〇八）で特筆すべきことは、アメリカからReach all Americansが来日、早慶をはじめとする日本の野球チームを総なめにしたことである。確か、早稲田が、十二対一、慶応が、七対〇で敗けた。早稲田の一点は、捕手山脇正治のランニング・ホーマーに

よるものであった。これらの試合は、横浜公園内の芝生グラウンドで行われた。この運動場のクラブハウスは、現在の常盤町のＹＭＣＡの前方、ホームネットは野外音楽堂の付近にあった。当日、グラウンドの周囲には紅白のだんだら幕をめぐらし、入場料は金二十銭であった。私は先生から、このアメリカチームのプレイをぜひ観ておく方が良いと勧められ、親父にその金をせびった覚えがある。見物席はスタンドではなく、立ち見であった。とにかく、日本チームとは格段の差があるように思われた。守備はもちろん、打撃も物凄かった。また二塁手デリハンティの守備は抜群で、イレギュラー・バウンドを軽くこなしたのには驚いた。聞けば、デトロイト・タイガースの正選手とか。このチームは大正二年（一九一三）に来日した、マッグロウ監督の率いるニューヨーク・ジャイアンツと、これが同伴したシカゴ・ホワイトソックスの両チームに比較すると、セミ・プロ程度であったのであろうが、ウィスコンシンとかペンシルヴェーニア等の米艦チームよりは、はるかに強かったようである。

ここで、話を再び伊勢佐木町に戻そう。前に記した野州屋の繁ちゃんの餓鬼大将時代はすでに過ぎ、私の代になっていた。私はリーダーとして年下の友達を集めて、晴天には、もっぱら野球をやり、雨天には新富の三階で、その連中に英語を教えた。どうやら、関根先生の影響らしい。これは神中（現希望ヶ丘高校）に入学してからも続けていた。学校で習ったばかりの受

け売りをやった訳である。

その頃、私には女の子のお友達は特にいなかった。だが、餓鬼大将になる前、尋常四年の頃、四ツ目屋（現在の不二家洋菓子店の向こう隣で、吉の谷というしるこ屋の隣）という化粧品店の娘でお幸ちゃんと、新富亭の並びにあった勲章焼とか人形焼という菓子を売っていた店のお千代ちゃん（初恋の人とは違う）という年下の二人を両手に花と手をつないで、夜の伊勢佐木町通りを歩いたこともあったが、これは近所の幼な友達というだけで、別に不思議ではなく、落語の「宮戸川」のような色っぽいものではなかった。

このお幸ちゃんは、胸を患って間もなく亡くなり、お千代ちゃんは父親の商売がうまくいかなくなったらしく、店を引き払ってどこかに移転した。その後、年頃になって、芸者として、新富亭の桟敷に来た彼女の姿を二、三度見かけたが……。

新富亭の前には、下駄屋（加賀屋）のおせいちゃんとか袋物屋（中山さん）のお妻ちゃんという看板娘がいたが、ほとんど口をきいたこともない。また、隣の洋品店の岡田さん（NHKのスポーツ・アナウンサーとして有名であった岡田　実君の実家）の家には恵子ちゃんという可愛い女の子がいたが、時々その笑顔を見かける位のもので、別に会話を交えたこともなかった。

小学校時代の私は餓鬼大将として、近所の若竹町（伊勢佐木町の裏通り）の米屋の息子で佐藤某という、これまた餓鬼大将の引率する子供連中と、菊の湯の路地をはさんでよく喧嘩をしていた。もっとも、前述の第二高等小学校から再び吉田小学校に戻った頃は、子供喧嘩は止めて、私は野球に没頭するようになっていた。私が野球狂になった原因の一つは、新富横町に住んでいた兄の友人、加藤吉兵衛さんの影響であった。吉兵衛さんは小学生の頃から野球の名手であった。上手というよりも天才といった方がよい位で、小柄ではあったが敏捷、その守備は確実であった。この先輩が私をよく引っ張り出しては、キャッチボールの相手をさせ、横町で「ミニ」野球をやらせた。吉兵衛さんはY校に進み、遊撃手として活躍、五年生の時には主将となって、全盛時代の慶応野球部を横浜公園の球場に迎え、名投手菅瀬一馬に三塁打を浴びせて、一対一で試合を分けたことがあった。卒業後、早大に進学してからも、その好守好打をもって鳴らし、巨人軍の総監督になった市岡忠男氏が捕手として名を成す以前に、吉兵衛さんは早大の主将として球界にその名を轟かせていた。

市岡さんは、早大に入学する前に、中学時代主将として来浜され、横浜公園球場で、遠藤金太郎、平井卯之吉をバッテリーとするY校と対戦しているが、その時の試合を私は観ている。遠藤、平井の両君は、ともに兄の友人であった。平井君はその後、慶応に入り、森秀雄とバッ

テリーを組んだ。平井さんとは、家に遊びに来た時にお逢いしたことがあったが、森君は近所の福富町の住人として顔馴染みであった。

私の野球の師、加藤吉兵衛さんは、しきりに私のY校への進学を勧めてくれたが、私には選手としての大成はおぼつかないので、神中に行くことにした。前記の森君は、神中に一度は入学したものの、おそらく、野球ではY校のほうがよいと思ったのであろう、中退してY校に翌年入学した。そして、卒業とともに慶大に進み、投手から捕手に転向、名投手小野三千麿（神奈川師範出身）とともに大毎に入り、小野、森の名コンビをもって、アメリカのプロフェショナルを破ったことは、わが国球界の語り草となっている。

野球の話につり込まれて、つい、中学時代を越えて、大学時代へと暴走してしまった。

ふたたび話を明治に戻そう。

2　神中時代

明治四十二年（一九〇九）、私は神奈川県立第一横浜中学校、通称神中（現希望ヶ丘高校）に入学した。私の生涯を通じて、この学校に入学できて、懇篤な先生方のご指導によって学び得

たことは、真に幸福であった。

この神中に入学直前に起こった不慮の事件—木村繁四郎校長が、強度の神経衰弱によって休学中であった生徒から傷を負わされた—のために、一学期中は教頭の吉川先生が校長代理を勤めるということになった。この事件で、加害者たる生徒に対して、先生がとられた寛大な処置は、実にキリスト者としての面目躍如たるものがあり、われわれはもとより、横浜市民は皆感動したものであった。この木村先生の慈愛に満ちた訓育は神中の伝統となったのである。生徒は、この校長に「象」という綽名を付けていたが、それは先生の温顔、特にその優しい眼を象徴するものであった。英語のナショナル・リーダーズのどこかにあった「駱駝飼いの息子アリー」が父を尋ねて旅する話の中で、その駱駝の名を確か、「ミーク・アイ」(meek eye) と呼んでいたが、このミーク・アイこそ先生の眼であると、私は思っていた。

さて、当時の神中の入試には習字があった。毛筆を使わせるのである。ところが、試験場に入る少し前に、その毛筆を家に忘れてきたことに気がついた。これで試験は駄目だなと青くなっていると、その時、校門から車夫が駈け込んで来るのが見えた。その車夫は、私の名を呼び、駈け寄って、家に忘れて来た毛筆を私に手渡した。「お父さんが心配されて、直ぐ神中まで届けに行っておくれ」と言って伊勢佐木町から俥屋に頼んで、私の後を追わせたのである。

当時、神中は藤棚の丘の上にあった。その時、父の温顔が私の眼前に大きく浮んだ。ほんとうに嬉しかった。この父の温情に報いたいと念じて試験にがんばった。

父は、子供に対してはもちろん、奉公人に対しても実に優しかった。また、新富亭の出演者に対する心遣いも、並大抵ではなかった。世間では、寄席などという稼業は、いわゆる水商売として卑しむ傾向があるが、これは決して身びいきではなく、父の性格はまるで春風のごとくおだやかで、口数は少く、声を荒らげるなどということは絶対になかった。私どもに対しては、ただ、肩に手を置き、静かにこちらを見つめて反省を促すだけであった。私は一度も父から打擲されたことはなかった。部屋で父がまれに、癇癪を起こしては、手許にあった珠の大きいそろ盤をガチャガチャと鳴らすことはあったが。

冬の夜、吹き込む寒風を正面から受け、背後からもスースーと冷気の逼る所で父は木戸番をしながらも、常に笑顔でお客様を迎える、その姿はもったいないとさえ思われた。殊に、痔を患ったことがある父が痛々しかった。

大風が吹いたと言っては心を痛め、豪雨には雨漏りを憂え、火事には類焼を恐れる父。伊勢佐木町の盛り場は火事早く、そのために、保険会社は火災保険を喜んで引き受けず、本当に苦労の絶えない父であった。特に台風の後など、あの大伽藍の急勾配の屋根を、鬼瓦から垂れて

いる鉄鎖をたよりに破損箇所を捜しに絆纏を着込んだ父の登る姿は、身震いさせるほど恐ろしいものであった。父は若い頃、祖父が普請道楽のために横浜の各地に寄席を建てたので、その建築現場で材木運びやら、高い足場を歩き廻る雑用に使われていた。そのため、私と違って、高所恐怖症ではなかったらしい。

ここで、親父のプロフィルを、故人になった落語家の桂文楽、六代目三遊亭円生、両名人の著書、『あばらかべっそん』（一二六頁）と、『寄席切絵図』（一九四～五頁）（共に青蛙房刊）とから引用致しましょう。

文楽師匠、「ここのご主人は無口な人格者で、特色は客が汚した便所をみな自分で掃除をします。そういう柄でない大旦那が、早起きをして自分ひとりで掃除をしているのですから、こっちは入りにくいときがありました。」

円生師匠は、「新富のお席亭は、苗字を竹内さんてえましてね、でっぷりふとった、りっぱなかたで、おとなしい、あんまり口もきかないというような、木戸へすわっていて、われわれがなんかいっても、「へえ、へえ」ってんで、非常にその、芸人にもやさしくって、あの旦那のおこったってえのをみたことがない。あの旦那はいいかただって、みんながそういっていました。それで、お便所のお掃除は、きまってこのご主人がするんです。木戸口の正面に梯子段

があって、その裏っかわが、お客さま用のお便所になってるわけで、その時分、ずいぶん汚したりなんかする人がある、それを、決して奉公人にさせないで、ご主人が自分でやる……これにはねェ、びっくりしました。

息子さんがいましてね、あたくしよりは年は上ですね、当時、中学生でしたか、それであたくしが退屈をしていたら、本を貸してくれました。あたくしも、本は好きだったんですけども、お金がないから、そうそう買えない。そうしたら、「イソップ物語」とか、「千一夜物語」というような、りっぱな本でしたよ、もう上の学校へ進んで、そんな本は読んじゃったあとだから、「これ、貸してあげる」ってんで、借りて読んだおぼえがあります。申し上げた、高座の上手（かみて）のほうの三階の、お席亭の部屋には、よほどの用でもなければ、われわれ、めったにあがって行くこともできませんけども、その本を借りるんであたくしァその部屋へあがってったことがありました。」

親父と一緒に永年暮した私の部屋のことなど円生師匠の記憶のいいのには驚きました。

こうした苦労をなめた父としては、息子達に家業を継がせることなど考えてはいなかったようだ。兄は東京のTという私立中学に入学したが、悪友が多かったためもあって、思うように

勉強に身が入らなかったので、信州下伊那の叔父のところに厄介になり、飯田中学に通うようになった。それからは、兄の成績は向上した。また、野球部員となり、三塁手として活躍し、両親をほっとさせた。

三男の竹雄は、かねて母の実家である栗沢の養子となり、これまた成績もよく、末弟の薫とともに叔父（養子、源之助）と叔母の庇護を受けながら、大自然の懐に抱かれて、良く学び良く遊ぶという環境の下に暮らしていた。結局、私一人だけが父の膝下でずっと暮らし、寄席の空気に一番馴染んでいたのであるが、少年の頃から海外貿易の夢を持ち、学科の中でも、英語、外国地理、西洋史の三課目が特に好きだった。

神中では英語の先生にも恵まれていた。伊藤弥門先生の作文、文法、片山義行先生の講読は、私にはありがたい授業であった。両先生は、ともにかつて信州の飯田中学で教鞭をとられていたという因縁があり、一層身近に感じられた。また、顔の青白い、冬になると常に喉をかばうように布を巻いていた大宮英之助先生の英作文は、テキスト以外に相当むずかしい作文の例を示される野心的な授業であった。先生は、毎日曜日に山手のデーリング神学博士のバイブルクラスに出席して、会話と作文の勉強をなさっておられたとか。後年、早大の高等学院教授

に栄転された。この三先生は、いずれも私の母校、早大英文科の御出身で、私にとっては大先輩であり、終生忘れ難い恩師でもあった。

次に、英会話のフーパー（Hooper）・安藤英富先生は、イギリス南部のチチェスターの御出身、日本に帰化された方で、すでに万国発音記号を利用して教授された。そのために、横浜一中出身者はどこに行っても発音が良いとほめられた。大先輩にあたる横浜病院長の須藤　求先生が一高の学生時代、夏目漱石先生から英語を習った時、その発音が良いというのでほめられたという自慢話を、幾度も聞いたことがある。須藤さんの時代、神中の外人教師は誰だったか詳かにしないが、とにかく本場の英語の発音が特に重要視されたことは事実である。

フーパー先生は、毎時間イギリスの格言を暗誦させ、その翌週、必ず、「先週はどんな格言を教えましたか」"What proverb did I teach you last week?" と質問される。それに対して "Make hay while the sun shines," （日の照る間に干し草を作れ）とか、"Strike the iron while it is hot" （鉄は熱いうちに打て）と答える。こうしたイギリスの格言は当時最初に習ったものである。

その後、私が早大を卒業し、一年志願の兵役を終わってから、一年半ほど商社勤めをした後で、千葉県立成東中学で初めて英語教師をやり、一年三か月の後、郷里の横浜に戻って、神奈

川県立商工実習学校の教諭になった時、久し振りに会話の講師として来られた恩師フーパー先生と再会する機会に恵まれ、種々御教示をいただいた。先生は、前述の如く、日本に帰化して安藤姓を名乗り、日本語が大変お上手で、冬、雪の朝など、「悪いものが降りましたね」という調子だった。先生の英語は南部イングランドの純粋なキングズ・イングリッシュで、板書された文字が非常に綺麗であった。先生はその後、シベリヤへの従軍記者として御活躍になったが、もう既に故人となられた。

西洋史といえば、晩年横浜市のＹＭＣＡ経営の英語学校長になられた岡部先生の講義は非常に興味があった。私は、箕作元八博士の西洋史講話を参考書にして勉強していたが、岡部先生の細密な資料がめずらしかった。特に、ローマとカルタゴとのポエニ戦争等、会戦の話には詳しい戦果の報告があり、細かい記録が引用された。おそらく、先生は英語がお達者なので、何かの原書から取材されたのであろう。

またまた、話が飛躍して、中学四年当時のことになってしまった。再び、神中に入学した明治四十二年（一九〇九）にまで時計の針を戻すと、この年、ロシア文学に通じた二葉亭四迷が四十八歳で没し、朝鮮総督の伊藤博文公がハルピン駅頭で暗殺された。

また、この年、横浜市は開港五十周年を記念して、わが国最古の市歌を制定した。森鷗外作

詩、南能衛作曲の「わが日本は島国よ、朝日かがよう海に、連なりそばだつ島々なれば、あらゆる国より舟こそ通へ……」というものである。

明治四十三年（一九一〇）、この年、武者小路実篤、志賀直哉等が雑誌『白樺』を創刊。また、『三田文学』が誕生している。政治的には韓国の併合があり、白瀬中尉が南極探検のために品川沖から出帆している。

ロシアの文豪トルストイが亡くなったのもこの年である。また、この年、アメリカの諧謔作家マーク・トウエインも亡くなっている。彼の伝記によると、一八三五年に誕生、一九一〇年に死亡となっているので、ハレー彗星に二度までお目にかかっているように説く者がある。七十五年を周期とするこの彗星は、確かに、一八三五年と一九一〇年とに地球上から見えたのであるが、呱々の声を上げたばかりの赤児に、それが見える訳もなく、また、一九一〇年にはすでに病床にあったこの老衰の作家の眼に、やはり、この彗星の映ずるはずもないのであるから、彼が実際に見たというのは嘘であろう。

しかし、この私は中学の二年生であり、実際に新富亭の三階から、東の空に、この彗星を見ているのである。「ハレー彗星現る」という報道が流された時、この彗星が地球と衝突して破

壊してしまうのではないかと危惧する者もあり、気の早い連中は地下壕まで築いたのである。

このハレー彗星は、一六八二年、フレムスティード、ハレー、ヘヴェリウムの三名によって観測された。ハレーは、さらに、その軌道を計算し、それが一六〇七年に現われたものと同一であることを発見、また、それ以前には一五三一年に現れていることを知り、さらに、一七五七年に現れると予言した。彼は自分の予言が適中するまで長生きできなかったが、かの彗星は遊星によって、その進路を妨げられ、二年遅れて現れた。次に予定された一八三五年の場合は、多くの天文学者によって計算され、一九一〇年の時は、グリニッジ天文台のコウエル（P. H. Cowell）とクラムリン（A. C. D. Crommelin）の計算通り正確であった。このハレー彗星の出現に関係があると推測されるのは、シェークスピアの四大悲劇の一つである『リア王』の第一幕第二場のグロスターの科白である。

グロスター（独語のやうに）「此頃うちの日蝕や月蝕は不祥事の知らせなのぢゃ。理学者どもは、あゝの、かうのと理屈を捏ねをるが、自然界は彼の結果でやっぱり種々の災害を受ける。愛は冷却する。友誼は破れる。兄弟は仲たがひをする。都会には暴動、地方には騒擾、宮中には謀叛人、親子の間の絆は切れる。我家の悪漢の如きが其予言の中に入る。

父に叛く伜ぢゃ……」

このグロスターが退場してから、妾腹の息子エドマンドの言う科白の中にも、「……その不仕合せの原因を太陽や月や星の所為にする人間は天体の圧迫で拠無く悪者にもなり、阿呆にもなるかのやうに思って……」（以上逍遥訳による）

というような天体による予言めいた暗示がある。

『リア王』

この作の登録が、たまたま一六〇七年十一月二十六日となっていることから、シェークスピア自身もあるいは、この彗星を見たかも知れない。

いずれにしても、シェークスピア、マーク・トウェイン、トルストイの三名には、何か三題噺めいた星の因果がまつわっているように思われる。

明治四十四年（一九一一）には、大逆事件の結果、幸徳秋水等十一名が死刑になった。

また一方、平塚らいてう等の「新しい女」青踏社が設立された。これは、十八世紀の半ばにロンドンで文学活動を行なったサークルの婦人連中が、普通は黒のストッキングを穿くところ

青いものを穿いたことに由来する。いわゆる blue-stocking と関連がある。

ところで、私どもが小学生の頃から国史の授業の際、南北朝問題で子供心を悩ませたものだが、この年に南朝が正統と認められている。南北朝というと、イギリスのランカスターとヨークとの争い、つまり、三十年にわたるバラ戦争（The War of Roses）のことが連想される。ヘンリ六世からリチャード三世にかけての紛争で、シェークスピアの国史劇（Chronicle Plays）の『ヘンリ六世』第一部、二部、三部と、『リチャード三世』の芝居に、その間の消息が詳しくうかがえる。特に、こうしたシェークスピアの国史劇が、わが坪内逍遥に大きな刺戟を与え、『桐一葉』を初め、『沓手鳥孤城落月』等、幾多の名作を歌舞伎に導入した功績は特筆に値する。

この年、祖母が胃癌で亡くなった。郷里の信州に埋葬するに先立ち、密葬して久保山の焼き場に行った。その時の野辺送りは極めて淋しく、少数の遺族の中で、孫としては、当時横浜にいた私だけであった。火葬場から、私一人で丘を越え、藤棚上の神中に辿り着いた。始業時間にはかなり間があったので、私は平屋建てであった南側校舎の教室に入る踏み石の上に腰をおろして、運動場の南端にある諸星君の家の辺りを茫然と見つめていた。

この祖母には随分厄介になった。祖母は、新富亭のお茶所（夜は寄席の中入りなどに、お客

に売るお茶やお菓子を管理していた）兼台所で働いていた。焼米が好物で、これにお茶を差して食べていた。少年の私の眼にも、随分と不消化のものが好きだなあと思っていたが、これで結局、胃を潰してしまったのであろう。

幼年の頃、私を初めて信州の家に連れて行ってくれたのもこの祖母である。当時の列車は実にお粗末で、座席にはアンペラが敷いてあった。忘れもしないが、私はゴム引きの油やさん（エプロン）をして、移り行く外の景色に見入っていた。特に八王子から先の左右にせまる山々がめずらしかった。小仏のトンネルにまず驚き、猿橋の峡谷をあっという間に見過ごし、笹子トンネルの長さにはいささか恐怖を感じ、薄暗い車内の灯を見上げながら、ゴウゴウ、ガタガタという騒音に悩まされ、汽車がトンネルを通過し、甲府盆地にサッと日光が注いでいるのを見て、やっと我に返った。韮崎までの間の引き込み線を上ったり下ったり、箱根の登山鉄道のようなまだるっこさも、その頃の私にはめずらしかった。それに、うねりくねる鉄路で、車窓から前方の黒煙を吐く機関車が見え、まるで、「大きいポッポ、小さいポッポ」と喘ぎながら走るように見えた。

次に、祖母と一緒に信州へ行ったのは、私が中学一年の時であった。神中に入学できたという得意な自分が、弟竹雄が投手をしている下伊那の神稲村小学校の野球をコーチするためであ

った。黒い漆塗りのバットを肩に、辰野駅から馬車に乗って神稲村小園（おぞの）の叔母の家に行くのだが、飯田まで十六里の行程を当時は伊那電がなく、伊那町まで来ると、旅籠に一泊しなければならなかった。十四歳の少年に、こうした田舎の旅籠に泊ることはめずらしかった。夕食の膳に出たのは鮭の煮つけ（これは恐らく今日のかんづめ物？）と天竜川で獲れた鯉の料理といったもので、かなりお粗末なものであった。翌朝は伊豆原まで馬車、それから天竜川を見下す耕地の間を走る坂道を、例のバットを肩に、まるで宮本武蔵が修業に出たような意気込みで下って、天竜の対岸に渡り、小園に辿り着いた。横浜を発つ時の母の話では、小園のお宮の広場は野球ができるとのことであったが、母の言葉はそれこそ「井の中の蛙」と言うべきで、全く狭いのには驚いた。弟の学校は俗に、八丁田圃と称する稲田を通り越した辺りの閑静な所で、天竜川の左岸もそう遠くはなく、遥か西方には飯田の城下を瞰下する風越山がそびえている。

私の野球は横浜仕込みで、早稲田や慶応の試合はもちろん、リーチ・オール・アメリカンズという本場の野球を見たこの眼は、相当のものと自負していた。しかし、コーチするなどとは、ちょっとおこがましかったが、そこは都会育ちの心臓でどうやらコーチの真似事をやってのけることができた。投手としての弟は、何といっても、このチームのピカ一であった。しかし、彼の一年下に菅沼というなかなか筋の良いのが私の眼にとまった。それで、来年の投手は

おそらく彼だろうと、弟に予言しておいたが、どうやらその予想が適中したことを後で知って嬉しかった。

その翌年、中学二年の夏にも、私は信州を訪れた。しかし、その夏は私にとって最も苦しい夏であった。と言うのは、第一学期の代数の成績が非常に悪く、学校から厳重な警告を受けたからであった。

神中では、毎学期の終わりに、成績不良の者に対して葉書の通知で、「左記の学科を温習下されたし」とあって、六十点未満、五十点未満、四十点未満の学科が列記してある。四十点未満をとると、大抵その年は進級できないというジンクスがあった。その恐るべき四十点未満代数という通知が家に舞い込んだのである。私は愕然とした。何としてもがんばらなくてはならぬ。

そこで、信州の飯田中学に在学中の兄の所へ行き、教えを乞うことにした。前述したように、兄は信州の叔父の家に厄介になって以来、真面目に勉強し、毎日八キロもある道を自転車通学しているにもかかわらず、その成績は向上し、特に代数がよくできるようになっていた。私は、この夏は野球のコーチどころか、自分の勉強が精一杯で、母屋と土蔵との間の空き地でキャッチボールをして、我慢しなければならなかった。

叔父の家は養蚕をやっていたため、この時期は特に忙しく、子供達まで動員して手伝わせて

いた。お蚕の籠洗いには家の傍らの地蔵佐川という細流でその籠を洗い、そして、それを干すというのが一仕事であった。しかし、叔母は私の事情を母からでも聞いていたのか、私にはその苦役を免除してくれ、「思う存分勉強しなさい」と言われた時にはとても嬉しかった。そのおかげで、朝から夕方まで代数の因数分解に没頭することができて、一応の成果をおさめて横浜に戻った。

二学期になると、一学期に不良点をとった連中は、しばらくの間、毎週一時間は残されて、庄司先生から懇切な指導を受けた。休み中の信州での兄の援助と、この恩師庄司先生のお蔭で、二、三学期は「ノーエラー」の成績をとり、進級することができた。この補習授業のために一時間留められ、友達と一緒に野球がやれなかった時は、一種の屈辱感のようなものを感じたが、恩師のご苦労を思うと心から感謝せずにはいられなかった。

明治四十五年（一九一二）―大正元年。この年、明治天皇が崩御遊ばされ、国民挙ってこの聖天子の崩御を悼んだ。また、民間においては、詩人石川啄木が二十七歳で夭折した。この年には米価が騰貴し、一般には不況の年であったが、日本活動写真株式会社の創立は、ひとつの明るいニュースであった。

ところで、明治大帝の御葬儀の行われる当日、私はある丘の上にいた。冷たい風の吹きつける日で、私は半コートを着ていた。それは、父が若い時に作った薄茶色のコートであった。そのコートを着た父の写真はとても素敵であった。色が白く、グッドルキングな若い頃の父の俤は、いまだに私の眼に焼きついている。その父が若い頃箱根へ湯治に行った時、片岡我童（今の片岡仁左衛門の実父、松島屋の青年時代の芸名）に間違えられたという話は、父が一杯きこし召すと出る自慢話であった。そうしたハンサムな父ではあったが、非常に堅物で、この父を慕って新富亭に来る綺麗な姐さんもいたようだが、父は全く無関心であった。その父が着た薄茶色のコートを仕立直してもらい、私が着ることにした。このコートを初めて着用したのがこの御大葬の日であったように記憶する。この半コート姿の自分の写真は、もちろん撮ってもらわなかった。

大正二年（一九一三）政府は満洲で五鉄道の敷設の権利を獲得した。しかし、内地では東北、北海道地方の凶作と、昨年に続いて良い年ではなかった。元老の桂太郎が死に、徳川十五代将軍であった慶喜公が逝去し、また、岡倉天心が五十二歳で他界している。

天心は文久二年に横浜で生まれ、明治六年、十二歳になるまでここで育っている。彼の数々の業績は列挙するまでもない。横浜開港百年記念事業として横浜美術懇話会の連中の提唱で、

「岡倉天心生誕之地」という記念碑――題字は日本美術院同人安田靫彦、ブロンズ彫刻は同じく日本美術院同人新海竹蔵、設計は横浜美術懇話会吉原慎一郎――が設立された。この設計者である吉原君は神中の後輩で、私が教授をしていた横浜高等工業学校建築科出身で、芸術院会員であった故中村順平先生の愛弟子である。

私がここで天心について語りたいことは、数ある名著の中で、The Book of Tea（茶の本）のことである。この書物は各国語に翻訳され、海外でも好評を博している。中世以来、わが武士道と共に日本人の精神構造の中に、その教養の基盤となった茶道の幽玄性を解明したこの好著が、大東亜戦争の終結した時、オーストラリアの大学でテキストに採用されたとか聞いている。天心は、東洋の平和を最も念願した人物のひとりで、インドのタゴールやガンジーと共に我々の忘れることのできない人物である。

私がこの天心の『茶の本』を語る時に、私の尊敬する故野村洋三先生のことを語らざるをえない。野村さんは人も知るホテル・ニューグランドの先代社長で、かつては本町通りでサムライ商会という骨董店を経営しておられた。このサムライ商会という名称については、次のような話がある。

野村さんが昔、アメリカからの帰途、新渡戸稲造先生と同船されたことがあった。その時、

お互いに将来どのような生き方をして国家に報じようかという話になり、新渡戸先生が「自分は日米親善の架け橋になるつもりだ」と言われると、野村さんは「日本の古美術を海外に紹介したい」とおっしゃった。それがやがて、新渡戸先生の『武士道』という英文の著作となり、野村さんの「サムライ商会」になったのである。全く偶然の一致と言わざるをえない。

この野村さんが最も愛読されたのが『茶の本』であり、この本をそれこそ隅から隅まで（From cover to cover）暗誦しておられた。野村さんの博覧強記であったことは、イーストレーキの英語学校時代から定評があったが、横浜の財界人中最も優れた英会話の達人であったことは、そうした英文の暗誦に起因するもので、本牧のお宅からテクシーでホテルに向かう途中、この暗誦をなさったというのは単なる伝説ではない。あの映画解説者でお馴染みの淀川長治さんの笑顔を見るたびに、私は常にこの偉大なハマの文化人を思い出す。とまれ、野村洋三先生の覇気が、少年時代の私の心に海外進出の野望を抱かせたこと、また、昔の横浜貿易新聞社長富田源太郎先生の実用英会話等の著書が、終生、英語教師の道を私に選ばせたことは事実である。

3　一年志願兵

戦前は、二十歳になると、男子は徴兵検査というものを受けなければならなかった。兄と私は、どういう訳か、同じ日にその検査を受けた。場所は横浜市役所であった。兄は長男ではあるし、兵役はなるべく避けたいと、本人はじめ両親も考えていた。昔は、この徴兵検査に不合格になりたいというので、小田原の道了様に願をかけに行く人が多かった。兄は小田原まで出かけたかどうかは忘れたが、生来、痔が多少悪いので、辛い物を食べたりするのはあまり良くなかったが、平気で食べるようになっていた。それに、いよいよ検査を施行する前に、お偉い軍人の訓話があった。それがまた痺(しびれ)のきれる程の長広舌で、それも、われわれを板の間に坐らせての話である。全くお尻が冷えきってしまった。このため兄の痔は覿面(てきめん)悪くなった。その結果、兄は検査で不合格となった。不合格と言えば、この日、自分の中学での先輩Bさんというのが検査に来ていたが、彼は強度の近視で、眼鏡を外すと一寸先は闇、よろめかんばかりで、即座に不合格となった。自分の身長は一般の平均よりはやや高く、体重は六十四キロであったので、甲種合格ということになった。兄と一緒に連れ立って伊勢佐木町の家に戻る私の足取り

は重かったが、反対に兄は軽快なステップを踏んでいた。兄は私に向って、検査官が私に言ったように「おめでとう」とも言えず、私の心を引き立てるのに苦心しているようだった。

私は甲種合格とはなったが、大学在学中でもあり、徴兵延期をしなければならず、勢い一年志願兵を選ぶことになった。そして金百八円を納付して、輜重兵を志願した。この自分の選択は、馬に乗れるなら楽だろうというあさはかな考えからであった。これは後になって飛んでもないものを選んだものだと後悔することが幾度もあった。

この一年志願兵制度で金百八円を納付するという根拠がいまだに分からないのであるが、自分なりの理屈を付ければ、一〇八という数字は百八煩悩ということがある。除夜の鐘は確か百八鳴らされる。一切の煩悩を捨て悟りを開くことであり、新年を迎えるにあたって旧套を脱ぎ捨て、新規にやれということか。とにかく、入隊に当たって、軍との契約を結ぶ定款、即ち諦感というのだろうと思った。「葉隠れ」では「武士道とは死ぬことと見つけたり」と教えている。俺もいよいよ武士道を学ぶことになるのだと自分を納得させた。

大正七年（一九一八）七月、早大を卒業し、その年の十二月一日、東京世田谷の第一師団輜重兵第一大隊第一中隊第五班に入隊した。班長はKという伍長だった。入隊の晩は、いわゆる

お頭付きのご馳走で、赤飯が出た。班長初め古兵の連中も柔しい言葉遣いであった。それが一晩経つと、猫撫で声が狼の唸り声に変わった。古兵の寝具の整頓は勿論、着衣の洗濯、食事の用意等各種の当番があったが、一番辛いのは厩当番だった。一期の検閲が終わるまでは、何と言っても厳冬の季節でもあり、万事ふなれなうえに、まだ扱い馴れぬ乗馬、駄馬三十頭を二人の新兵が馬房の掃除をしたり、飼糧の世話をする。雨が降らなければ、寝藁を外に運び出して干燥し、夕方その寝藁を元の馬房に運び入れるのだから大変な労働である。東京といえども真冬の午前六時は寒気が厳しい。馬の手入れをする時、厩舎外の柵に馬を索で繋ぎ、立て髪から首筋、胴、脚などを木梳、金梳で梳けずる時、両手が凍てつき、思わず、しばらく指を立て髪の中に埋めてしまうことがよくあった。こうした作業が時間通り運ばないと、連続当番を命じられ、もう一週間この苦役をさせられる。英米人ならば、食事はゆっくりとるのが建て前であるが、新兵はなるべく早く食べ終わらなければならない。ゆっくり咀嚼して味わうなどということは許されない。ところで軍隊の検閲はすこぶる厳しく、その結果が成績に影響する。従って各班は勿論、中隊間の競争も熾烈である。官給品の検査はやかましく、私物を所持していると咎められる。輜重隊では、階下に輜重兵。二階には輜重輸卒の班がある。検査は二階から始まり、階下へと来る。その間、員数の遣り繰りをしたりする。軍隊の教育は徹底している。で

きないとは言わせない。馬に乗れなかった者でも乗れるようにさせる。最初鎧を付けず乗馬するのだが、立て髪を左手に、鞍の前橋に右手をかけて飛び乗る芸当が、この尻の重い自分にもできるようになったのである。鎧無しでの乗馬は、要するに脚を固めて、手綱によらず、馬上でバランスをとりながら、馬を御す技を修得することである。第一馬を恐れぬ度胸というか、心構えをまず持たなければならない。「オーラ」と呼んで馬の臀部を軽く敲き、馬房へ入って飼糧を与える。それが第一歩である。「噛む」「蹴る」「逃げる」という三癖のある馬の尻尾には赤い布切れが結ばれている。人間でも危険人物は、「彼奴は赤だ」と言ったり、ゴー・ストップの指示にも赤い信号が出る。乗馬隊ではこの赤布の馬では苦労する。「逃げる」癖のある馬に逃げられ、新兵が麦袋を携えて、追い駈けている様は正に「権兵衛が種子蒔けば」という俗曲を思い出させる。ミレーの「落穂拾い」等の静寂さは見られず、ドタバタ喜劇の一齣(こま)というところである。人間と同様、馬も教育が大切である。馬の場合は「調教」と言う。この調教を誤ると飛んだことになる。乗馬の調教を誤って輓馬(ばんば)に格下げられた馬があった。一期の検閲がやっと終わった頃であった。工兵が使用する架橋材料の運搬を始めた最初の日のことであった。自分が厩に駈け込んで輓馬を一頭物色しようとしたが、すでに殆ど出払って一頭しか残っていなかった。生来、おっとりしたというか、あまり敏捷でない自分が一番遅れて厩に来たと

いう訳である。この時の当番だった古兵が「その馬は素晴らしいぜ」と言ってそれを私に勧めてくれた。「これは乗馬だったんだから」と更に彼は説明した。私は急いでその馬を馬房から引っぱり出して営庭に向かった。なるほど気品のある奴だと思った。架橋材料を繋駕(けいが)して、いよいよ輓馬部隊の行進が始まり、車輪の音がガラガラと烈しく鳴り出した。その途端、私の輓馬が狂奔し始めた。私は平常の教訓に従って手綱を放すまいと懸命に努力した。然し馬力には抗し難く、私はズルズルと引きずられて行き、馬はますます荒れ狂って、一回転するや、倒れた私の身体をその車輛が轢(ひ)いて通過した。私は一瞬眼が眩んだように思った。演習の指揮をしていた志願兵係りの将校は「アッ」と叫び真っ青になった。次の瞬間、私はムクムクと起ち上がった。すると、教官は「馬鹿野郎」と怒鳴った。教官の顔には安堵の色がアリアリと見えた。

その後、一次勤務や二次勤務で、三か月宛召集を受けた時、例の教官は、私の顔を見ると、常に「あの時俺は志願兵を一人殺したかと思ったよ」と言うのであった。その事故の直後、早速、母のところへそのことを手紙で知らせた。すると、母は、これは本当に生命拾いをしたというので、当時慶応の理財科に在学中の弟竹雄を直ぐに成田の不動様へお礼参りに行かせた。迷信というかも知れぬが、この事故の時、母が私の財布の中に入れて呉れてあった不動様のお

守りが真二つに割れていたことを班に戻って私は発見したのであった。正に奇蹟と云えることであった。と言うのは、例の車輛が私の身体の上を通過する寸前、車輪が小石に触れてバウンドしたらしい。私の鼻梁に微かにその車輪の触れたかすり傷が付いていたことである。鏡でその傷跡を見た時、私はぞっとした。あの時教官は正しくこの志願兵が死んだに相違ないと思ったのである。野球ならばタッチ・アウトになるところであった。

一期の検閲が終わってしばらくすると私は第五班から第二班に移された。これはたまたま、ある日曜日に、例の意地悪班長のために外出禁止を食ってボンヤリ兵舎の横に起っていた時、週番士官のK大尉が巡視に来られ、「何故外出しないのか」と質問したので、その理由を述べると、わざわざ中隊本部から私の軍隊手帳を持参してくださって、外出させて頂いたことがあった。これがご縁で大隊本部付のこの大尉の下で書記の手伝いをすることになり、班も第五班から第二班に変えてくださった。この第二班の班長は大久保という伍長勤務の上等兵で、実に模範的な班長であった。そのお蔭で、それからというものは勤務も快適になって行った。

ところで志願兵には消灯後、一時間延灯願いを出して学習することができた。然し何と言っても昼間の訓練のための疲労には勝てず、勉強らしい勉強はできなかった。折角大学で修めた学問から遠ざかり、馬鹿になって行くのが分かった。

然し、一面で、親友のできたことは救いであった。中でも、牛込の矢来から来ている松岡義雄は、最初第五班の同僚であり、私の班が変わっても、お互いの信頼は厚く、除隊後も良い友であった。彼は建築技師としての仕事に忙殺され、逢う機会もだんだんと少くなり、遂にその消息を断ってしまった。

同じ横浜出身の田辺快厳は横浜の名刹玉泉寺の養子で、拙宅から程遠からぬお寺の住職であったが、これまた消息がない。千葉県千倉出身の山田繁は優秀な志願兵、中村孝逸は甲州塩山出身で、山田と同様、中学出の真面目な男だった。もう一人東京出身の矢島は早大商学部の卒業で、乗馬の上手な快活な男だった。確かに皆、純情な青年ばかりだった。

一年志願兵として入隊中の出来事（大正八年）に朝鮮の独立運動、即ち三・一事件があり、普通選挙要求の大示威運動があったりしたが、一方、対独講和ヴェルサイユ条約の調印が行われ、シベリヤからの撤兵が開始されるようになった。学界では野口英世博士の黄熱病の病源体発見という快事があった。

われわれの入隊中には、最初、シベリヤへでも駆り出されるのではないかという不安があった。しかし上記の撤兵開始によって兵隊の不安も静まり、夏季の習志野演習も楽しい思い出となった。

ご承知のように、玉川線の大橋上にある上目黒のわが輜重兵第一大隊が習志野に向かって行進する時は、夜半からで、渋谷から赤坂見附を経て銀座へ出る頃は、さしもの繁華街にも人影が疎(まばら)になり、目的地の習志野の廠舎に到着するのが正午近くであった。

代々木とか駒沢の練兵場で教練していた東京の部隊が習志野の原頭に起つと、その広大なことに驚くのであるが、緩(ゆる)やかな起伏のある演習場には到る所に凹地があり、その斜面には柴栗の簇生する灌木があった。東京育ちの馬はさすがに、乗馬も輓馬も真夏の炎天下の行軍ではヘバリ気味だった。でも、一日の演習が終わり、食事も済んで、廠舎の周囲を散歩する時には涼風も頬を撫で、一種の解放感を覚えるのであった。

翌年（大正九年）第一次勤務で三か月間召集されて再びこの習志野の廠舎に来た時、確か、青島の独乙軍俘虜が習志野に収容されているのを目撃した記憶がある。さすがに独乙の俘虜は囚(とらわれ)の身を徒(いたずら)に恥じて卑屈になることなく、のんびり生活をしているのを見て感心した。特に週末には種々の催しがあり、拍手喝采、声を上げて打ち興ずるのであった。朝早く、飼育のために広い野原にブーブーという豚を駆り立てて行く俘虜の姿が見受けられた。またこの豚飼いの背後から日本の兵隊が銃を携えて見張りながら歩き廻っている光景はまるで漫画のように思われた。

さて、話が一年先に飛んでしまったが、話を元に戻して習志野行軍のことを回顧すると、無事演習も終わり、帰途に就く時、出発の時とは全く逆で、午後三時頃習志野を発った。大体夜行軍によって東京市内に入り、帰営するのだが、さすがに市川の辺りに差しかかる時分にはようやく睡魔の忍び寄る頃で、例の鉄橋を通過する時、橋の下を通る小蒸汽船のけたたましい汽笛に馬が狂奔して、川岸の崖下へと疾走して転落する事故などがあり、しばらくして、隊伍を整えて再び行軍を続け、坦々たる道路上で十数分間の大休止ということになる。輜重兵は下馬する。輸卒の連中は肩にした銃を放り出して傍の砂原に身を投げる。空には皓々たる月が冴えており、その光が砂原を白く照らしている。「砂原だ」と輸卒が思ったのは、実は、道路脇に流れる小川であった。それで、ザブンと音を立ててその流れに飛び込み濡れ鼠となって逼い上り、やっと眼を醒ますという一幕もあった。

こうした演習の中で、何といっても一番兵隊の喜ぶのは年度末に施行される師団の機動演習であった。われわれ志願兵としても、終末試験もどうやら無事に済み、この行事を完了すれば、一年の勤務を終えて除隊ということになり、娑婆に出られるのだ。この時の機動演習は埼玉、千葉の両県に跨がっていた。

演習がいよいよ終わりに近づき、私共の輜重隊は千葉市に宿営していた。その時、わが中隊

のM中尉が部隊を離れて前方に向かっていた。自分は同中尉に連絡するために派遣されて師団のお偉い方のいるところまで馬を進めた。そこには第一次世界大戦で勇名を轟かせた独乙のヒンデンブルグ元帥のようなピンと跳ね上った立派な髭をたくわえた陸軍中将河合　操閣下が参謀連中と一緒におられた。私は馬の手綱を控えて、「さて、どういう風に切り出そうか」としばらく躊躇していると、閣下の方から声をかけられた。「そこの志願兵はどんな用事でここへ？」と尋ねられたので、即座に中隊からの指示を告げた。すると、閣下は「君の捜している将校は居らぬ様だが、わしらはこれから下志津の廠舎に行くところだ。或いは君の中隊の将校はそこに行っているかも知れぬ。とにかく、わし等と一緒に来たまえ」と仰言って、師団長が先頭で馬を進めた。私は一番最後に随った。もう日は暮れかかり、空には宵の明星が輝き始めた。昨夜の雨で下志津の原には此処彼処にプールができていた。ある場所では恰も湖水のように水が満々としていた。自分は師団の参謀にでもなった気分で、胸を張り、この一行と共に悠然と馬を進めて行った。

下志津の廠舎に着いた時は、もうすっかり暗くなっていた。廠舎の灯がぼんやりと見えた。急ぎ廠舎へ馬を走らせて、自分の隊の将校が来ているかを糺したが、もう已に帰ってしまったとのことでがっかりした。で、やむなく直に千葉へ戻ることになったが、「往きはよいよい、

帰りは恐い」、とは昔からいみじくも言ったものである。往路は凱旋将軍の如く意気揚々としていたが、帰路は敗残兵のような惨めさであった。前述した雨後の草原には到る処に湖水が点在し、馬の手綱をとる自分にも自信がない。方角がさっぱり分らぬ位遠景は暗の一色、空に閃めく幾多の星はこの孤独の騎士を嘲笑する如く明滅する。何処かの乗馬隊が彼方に野営しているらしく、しきりに馬の嘶(いなな)きが聞えて来る。自分の馬はその方向へと引っぱられるように進路を変えたがる。そのつど手綱を控えるのがやっとである。

前方は茫々たる闇である。遂に自分は「ままよ、馬の方が方角を知っているかも知れぬ」と思って手綱をぶっ放した。馬は疾駆し出した。そしてこの原の行き止りか—土手の手前でピタリと停止した。その土手に沿うてしばらく行くと、道路に出る土手の切れ目に来た。そこからその道路を辿って、遠くに灯の見える辺りに向って馬を誘導した。その内に坂道へと差しかかった。昨日の雨で道は非常に濘(ぬか)っていた。馬がもう歩けぬ位に泥濘がひどくなった。それに坂道を下ることは危険でもあった。自分は遂に馬から下りて歩くことにした。然し馬は滑べり、百何十貫もある馬の身体が轡(くつわ)をとる自分の肩にのしかかる。馬の首を上方にグイと上げてから自分の足を運ぼうとすると、片方の長靴がスッポリと脱げ、また次にはもう一方のが脱げてしまった。そこで、泥の中にめり込んだ長靴を抜こうとしたがなかなか骨が折れた。全く牛蒡(ごぼう)抜

きの業であった。

馬もさぞ喉が渇いたであろうと、私は道脇の笹に溜った玉露を馬の口中に入れてやったりした。こうして難行苦行の末、やっと千葉に宿営している自分の部隊に辿り着いた。下志津まで捜しに行った尋ねる将校はすでに帰っていた。

こうして無事、機動演習も終わり、嬉しい除隊の日も近づいたが、これより前に、かねて結婚を申し入れていた細井多美の親父幸治郎氏から一度逢ってほしいとの手紙が来た。

場所は日比谷公園内の松本楼という料亭であった。勿論、日曜の外出日だった。面会の目的は、要するに、親父として、私が終生多美を幸福にしてくれるかを確認するためであった。私の念願が達せられる訳だから、はっきりそれに対して誓約したことは申すまでもない。

大正八年（一九一九）十一月三十日私は除隊した。この除隊の報を何処から聞かれたのか、恩師長谷川天渓先生が例の「二十日会」のメンバーを召集して、三越付近の「吉川」とかいう牛肉屋で歓迎会を開いてくださった。

私は思いがけなくもこのような盛大な歓迎会を開いていただいて感激した。先生はじめ二十日会の会員から祝福を受けていよいよ実社会に乗り出すのであるが、宴が終わるにあたって、

天渓先生は私の顔を熟視しながら、「君は将来きっと学校の方へ戻って来るようになるよ」と予言された。この先生の予言は、その後、三井系の貿易商社に一年有半勤務したが、大正十年の不況により海外の支社で働く夢が破れたので、折角取得した英語教員の免許状をもって二年三か月教壇に起ったが、更に研究のため米英に留学して教師となる決意を固めた。長谷川先生の予言は正に的中したのである。